

群馬県歴史の道調査報告書第九集

歴史の道調査報告書

古河往還

群馬県教育委員会

資料

N.56-2380

文化財保護課保管

昭和56年9月25日

古  
河  
往  
還

## 序

昭和五十年代における本県の社会開発の進展は著しいものがあります。関越自動車道・上武国道・上越新幹線の開通を控え本県の産業経済文化にとって飛躍の年代といえましょう。また、これら交通網の整備に伴う社会生活の変革は県民の生活にも大きな影響を与えてきております。

これら近代化の波は、ふるさとの香りともいうべき郷土の歴史的遺産を急速に滅失させつつあり、バランスのとれた開発が望まれ、保存対策が強く叫ばれるようになってまいりました。

本県では、こうした要請に応じて、昭和五十三年度から国庫補助を得て、四か年計画で歴史の道調査を実施してまいりました。本年度はその第三年次にあたります。これまでの二か年の調査結果については既に報告書で紹介したとおり、多くの成果を挙げることができました。

本年度の調査対象街道は、下仁田道、清水峠越往還、佐渡奉行街道、古戸・桐生道、古河往還の五街道であります。下仁田道を除くと比較的短い街道であります。しかし、それらの街道はその地域にとって重要な役割を果たしてきた街道であり、また、それぞれ特色のある道でもあります。

中世の道の面影をとどめる清水峠越往還・佐渡奉行街道。我国のシルクロード及び低湿地帯の街道である古戸・桐生道及び古河往還。また、砥石、こんにやくの道としての下仁田道等、地域の特徴を持っております。

本調査で得られたこれら貴重な成果を、本書で広く県民に紹介して活用していただくとともに、今後における保存対策の資料として参考にしてまいりたいと思ひます。

なお、束筆ながら、調査の実施と報告書の作成に御協力いただいた調査員の方々や、地元教育委員会並びに協力いただいた地元のみなさまに深く御礼申し上げる次第です。

昭和五十六年三月一日

群馬県教育委員会教育長

横

山

巖

# 目次

序 群馬県教育委員会教育長 横山 巖

## 歴史の道調査実施要項

### I 古河往還の概観

一、はじめに……………3

二、街道と文化……………3

三、中野餅……………4

四、往來の実態……………5

### II 道の確定

一、道の確定……………7

二、沿線地図……………13

### III 古河往還の現状と文化財

一、太田宿から石打集落へ……………17

二、石打集落から館林城下太田口へ……………23

三、館林城下太田口から江戸口へ……………28

四、館林城下江戸口から海老瀬集落へ……………31

あとがき……………40

## 歴史の道調査実施要項

### 一、目的

古来、人や文物の交流の舞台となってきた古い道や水路は、生活や文化を理解する上で重要な意味をもつものであるが、並木街道や関所跡として部分的に指定された史跡等を除けば、開発その他によって急速に失われてきている。

そこで、これら「歴史の道」ともいべき由緒のある道や水路とそれらに沿う地域に残された文化遺産を調査し、周囲の環境を含めて総合的・集約的に保存整備し、県民による積極的な活用に資することを目的とする。

### 二、調査主体者

群馬県教育委員会

### 三、調査の方法

#### (1) 指導

調査の方法・計画・まとめについては、文化庁係官より指導を受ける。

#### (2) 総務

調査の計画・運営・地元との調整等、全体を総括する。

県教育委員会事務局管理文化財保護課課長並びに担当職員

#### (3) 調査員

三枝友治 千代田村教育委員会事務局長

沢口 宏 太田女子高等学校教諭

石原 純 一 伊勢崎女子高等学校教諭

今井 英雄 中央高等学校教諭

若林 宏宗 桐生高等学校教諭

荻野 朝則 館林市立第八小学校教諭

#### (4) 調査協力機関

太田市教育委員会 館林市教育委員会

板倉町教育委員会 明和村教育委員会

邑楽町教育委員会 千代田村教育委員会

#### (5) 調査方法

○一次調査

関係市町村の協力を得て、調査対象の旧街道の路線と現状との異同の概略を把握する。

○二次調査

一次調査の結果を参考にして、調査員による現地調査を実施する。

#### (6) 調査対象

昭和五十五年度は、古河往還及び他街道とする。

(調査事項)

① 道・河川・運河等及びこれらに沿う遺跡、例えば一関・番所・一里塚・宿場・本陣・脇本陣・庄屋等屋敷・御茶屋・詰所・御飯屋・城館・陣屋・奉行所・古戦場・会所・並木・石畳・橋梁・隧道・常夜燈・道

標・地蔵・道祖神・井戸・河岸・渡船場・波止及び歴史的名所（杜寺・札所・霊場・温泉・宿坊等）・名勝（庭園等）―の分布状況と保存の実態。

⑩ 無形文化財・民俗文化財・天然記念物の分布状況と保存の実態。

⑪ 道・運河の歴史的意義・格・沿革。

⑫ 河川の歴史の変遷。

⑬ 沿線に設置されている博物館・郷土館・資料館・史料館などの公開施設の実態と問題点。

⑭ 江戸時代の国界・藩界（正保・元禄・天保）及び郡名。

#### 四、調査のまとめ

報告書は、A4版サイズとし、縦書き、二段組みとする。道、運河ごとに分冊として作成する。

保存資料は、地図・写真・その他とし、文化財保護課に保存し、県民の利用に供する。

## I 古河往還の概観

### 一、はじめに

古河往還は、例幣使街道の太田市新島の追分から埼玉県北川辺町を経て、茨城県古河市に至る街道である。

古代、武蔵国が東山道に属していた頃は、上野国府から武蔵国府に行くには新田駅から邑楽（おほらき）駅を経て武蔵国に入った。この東山道は、現在の古河往還の一部と重複していたと考えられる。

また、建暦元（一一二一）年、親鸞が越後国から常陸国に行く途中、佐貫荘に数日滞在し、その時浄土真宗の悟りを聞いた。この時通行した道路は、古河往還と考えるのが順当であろう。

このように、中世以前は、主要道路としてよく利用されたと思われる。

しかし、家康が江戸に幕府を開いてからは、江戸と奥羽地方を南北に結ぶ諸街道が発達したことや、利根川や渡良瀬川の河川交通におされた。このため古河往還は、太田、館林、古河を除くと宿場もなく、ローカル線となっていた。

古河往還は、昭和九年の陸軍特別大演習の大兵団の機動作戦のために、道路の拡幅やつけ変え工事が行われた。また、昭和三十五年以降の高度成長期の道路工事によって、往時の面影が失われている。

道路のつけ変え工事によって、通行が便利になったところでも、葬式の野辺送りの行列は、現在でも新道を行かず、旧道を行く所あり昔からの道路

との結びつきの深さが感じられる。

この古河往還を村々では、どう呼んでいたか。明治十年の村誌をもとに考証した。

太田市追分から龍舞（田山田郡）までは、館林道の呼び方が多く、時には古河往還とも言っていた。館林城下以西の邑楽郡では、通常太田道と呼び前橋道とも言うことがあった。旧多々良村では、古河往還と呼んでいたことも確認された。

館林城下では、南北の大通りを日光脇往還と呼んでいた。

館林城下以东の邑楽郡では、古河道、古河往還、下総古河往還とも呼んでいる。

なお、安政二（一八五五）年の館林藩の封内経界図誌では、城下以西では太田道、以东では古河道と記している。

### 二、街道と文化

#### 1 中世の文化財

太田市の南東部から邑楽郡、館林市地方は、平安時代末から佐貫氏の支配下である佐貫荘であった。このため、古河往還ぞいには、中世の優秀な文化財がある。

館林市西本町愛宕神社の青石地蔵板碑は、高さが約二メートルもあり、こ

の近辺では最も大きいものである。地藏像の下に素朴な筆勢で、

右志者為過去慈父出離

生死往生願成仏得道

文永第貳西二月 日

十三ヶ歳十二孝子敬白

と四行に銘文が刻まれている。文永十(一二七三)年に造られたこの板碑は、地藏信仰板碑の中では全国で二番目に古いものといわれている。

館林市台宿町五宝寺の不動まんだら板碑は風雅な筆勢で

永仁丁酉五年三月

と銘文が刻まれている。保護のためまわりをコンクリートで固めているが、前述の青石地藏板碑に次ぐ優秀なものである。

板倉町板倉宝福寺の木彫性信房座像も興味深い。この像はノミさばきが伸び伸びしている。次に示す延文六(一二三六)一年の墨書銘から推して鎌倉時代中期のものと考えられる。

上野国佐貫庄板倉法福寺先師横曾根

性信上人御影第三度御彩色畢

性信房は、親鸞の弟子廿四輩中の第一弟子であることから、現在古河往還沿いには、真宗関係の寺院は数少ないが、中世における真宗の活発な布教活動が想像できる。

板倉町板倉雷電神社末社八幡宮・稲荷神社社殿は、室町時代末期の建築である。この建物は、柱や礎石等に京風の造作が認められる。応仁の乱以降の文化の地方伝播を示すよい例である。

このように、中世の文化財がかなり残っていることは、かつて古河往還が東西を結ぶ重要な道路であることを示すものと考えよう。

## 2 地形による文化

古河往還は、平田部を通っているため、山あり谷ありや、大河を渡るという旅の苦しみは少なかつた。そのためか、他地域と比較して道祖神が非常に少ない。

しかし、低い土地であるため、長雨による道路の冠水があった。そこで、集落から集落へ進む道路は、可能な限り微高地を選んで設定されている。

特に、石仏の分布をみると興味深いものがある。女人講中で建てた如意輪観音が邑楽郡邑楽町を境にして、西は二十二夜信仰であり、東は十九夜信仰である。これは、上州弁と東北、茨城弁の方言の境界線とも一致している。

利根川、渡良瀬川の間を通っている古河往還の沿線は、河川の氾濫に悩まされた地域である。そのため、水塚、揚舟といった他地域にない独特のものがある。

水塚は、洪水の時に水害から、人命・財産食糧等を守るために、土を三メートルから五メートル位盛土した上に納屋を建てたものである。ふだんは、食糧、衣服等を保存している。揚舟は、下に降ろすとすぐ水に浮かべられる状態を軒下につるしておき、洪水時に降ろして使用するものである。

また、水害の多い地域の特色として、水害から人々を守護するといわれる長良(長柄)と書くものもある。神社が分布している。その外、水神塔が数多くある。

## 三、中野 餅

古河往還沿線で最も代表的な産業は、邑楽郡中野村(現邑楽町)を中心として織られた中野餅である。

この地方の織物は、鎌倉時代に始まると伝えられている。室町時代に書かれた神風抄に「内宮 邑楽御厨 布五十段五十六丁」と記されていることから、この頃には、特産物として生産されていたことが分かる。

中野近辺では、江戸時代中期の宝暦年間になり結城編を織り出したが、享和年間には清吾織という袴地を生産し江戸に送り出した。

幕府の御触書に「百姓は衣類の儀、布木綿より外、帯衣裏ニモ仕間敷事」とある農民対策が進む中で、木綿作りが全国に広まっていた。中野においても、天保、弘化の頃、才格子という糸入格子の中に点々と緋を入れる木綿縮織が生産された。

安政年間になって、後藤まい（暮は邑栗町水明寺にある）によって「木綿堅散らし緋」が工夫されたといわれる。これが中野緋の起原である。その後、縦横緋を混織するなど織方の工夫が続けられた。

明治維新後、中野緋は発展を続け、大正期には、西の大和緋（大和高田市）、東の中野緋といわれるように、日本を代表する夏向木綿緋となった。

#### 四、往來の実態

古河往還は、江戸時代は前述のように主要道路でなくローカル線である。そのため、大名等の往來は日光脇往還と重複する館林城下のみである。また、この往還を完歩した記録もない。しかし、その一部を旅行した人の日記等によって往來の実態を確かめたい。

##### ① 吉田松陰の「東北遊日記」

幕末の思想家である吉田松陰は、東北地方旅行の帰路、嘉永五（一八五二）年四月に館林を通過し江戸に帰った。古河往還関係について述に記す。

四日晴、朝足利を発し、十年寺村、猿田村を通ぎ、舟にて寛川に渡る。川に沿うて下り梁田駅の傍を通ぎ、是即例警便街道なり。而して吾輩是に由らず川に沿うて下る。梁田駅名を以て郡名となす。

川を離れて寛萩に到る。小橋あり村落合と名づく。橋を越ゆれば即ち邑栗郡木戸村、館林の領する所なり。行くこと一里ばかり館林に入る。秋元但馬六万石

の郡城なり。

三科文次郎を訪はんと欲し、大手門に抵る。門を守る者云々、三科宅は城内にあり、法として旅客の入るを許さじと、因て片町に至り、書を作り使を遣はす。余々文次郎在らず、索然として去る。（略）

行くこと一里余、羽岩田二村の間に木柱を立つ。書して曰く「自是東西南館林領」と、板倉に至り右折して便道を取る。舟にて小川を渡り高島神社の傍を過ぎて刀根川の堤上に出で川に沿うて下る。

文中、寛川は村名と誤って書いたものであり渡良瀬川のことである。また、木柱の方位を間違えている。なお、三科文次郎は、松陰と同じく山鹿流の兵学家である。

この後、埼玉與北川辺町から高瀬舟に乗り、翌四月五日に江戸に戻っている。

##### ② 高山彦九郎の「江戸旅行日記」

寛政の三奇人の一人であり、勤皇の志士である高山彦九郎は、安永五（一七七六）年三月郷里細谷村（現太田市）を出発した。小泉村（現大泉町）を経て、館林を通過し江戸に向かった。旅行日記に古河往還の裏街道通行の様子がわずかに記録されている。

安永五年丙申三月十五日、新田を立ちて江戸へ赴く。五つ半に旅装して立つ。

（略）爰を出でて城下也、入口門あり。日車町細柳町、右に禰とて寺とて百石御米印地あり、大寺なる。本郷屋町を東へ次に谷越町を北へ行。此辺本町也。札の辻を東へ入りてれんじやく町といふ。堀はたへ出す。堀は南北へ三、四丁逢手門南向也。塙を片町といふ。北に祖屋敷と覚しき見ゆる。南へ堀はたを行きて右西に入りてかぢ町。忠町余にして谷越へ出づる也。南町門を出てあら宿也。是を南に行き江戸道、行田へ四里といふ。あら宿より東へ行き古河道はより四里八町。しばらく休みて、我は古河道へ入りて、沼のはたを目懸て城を西に見て行く。矢食、沼にのぞみて佳景也。寅の方と行きはねつく村へ入る。

二、三軒のみ也。猶行きてつちがさき也。三町四方計りの古きつち也。つちの数八百八本也とぞ。さるをがせ有り。今花盛也。今年花去年より少なしといふ。(略)

沼のはたを行きて、またはねつく村の中へ出づ。野木大明神の社有り、さし置地也。

野木大明神は、今の楠木神社である。この後、杉渡して渡良瀬川を渡り越名(現佐野市)に泊っている。

### ③ 館林藩の御定賃銭

御定賃銭は、伝馬所が徴集する人馬の賃銭で、諸侯および士人の旅行または荷物の運搬に適用したものである。伝馬所廃止の時、館林の定置人馬は、人足二十五人、馬二十五疋であった。

天保七(一八三六)年の井上河内守より御問合答の内容を次に記す。

#### 一、宿駅役人馬高並御定賃銭等之事

役人馬高町内拾参人拾参疋御定賃銭左之通

館林從新郷宿迄 人足 四拾七文

本馬 九拾五文

軽尻 六拾六文

人足 三拾八文

本馬 七拾六文

軽尻 五拾参文

人足 三拾八文

本馬 七拾六文

軽尻 五拾三文

人足 五拾参文

本馬 百拾文

軽尻 七拾三文

人足 三拾八文

本馬 七拾六文  
軽尻 五拾三文

一般庶民の旅行および荷物の運搬には、相対賃銭であった。相対であるだけに御定賃銭に比べはるかに高額になることが多かった。

## II 道の確定

### 一、道の確定

#### 1 太田宿から石打集落へ

日光例幣使街道太田宿の東はずれ、追分地藏のところから例幣使街道と分かれ（旧例幣使街道は栄町公民館前に約一〇メートル程残っているのみ）現



古河往還起点より東をみる



天神山古墳周堀 中堤上の道 右の低い部分が内堀

前橋・古河線（国道二二三号）をほぼ真東へ進み、東武鉄道伊勢崎線の踏切を越え、右に獅子吼寺入口の案内板を見てやや進んだあたりから、道は南へ三〇度程方向を変えている。しばらく道なりに進むと右側の家並みが切れたあたりの右南方に東国一の規模を誇る太田天神山古墳が見えてくる。現在の国道は天神山の後田部墳丘をかすめるように走っているが、この古墳には二重の堀が回っており、堀と堀の境目の土手（中堤）にそって道がっている。幅約三メートルで簡易舗装されているこの道が旧道である。この細道を更にとどり、女体山古墳の前を通り、また、国道にもどり、七・八〇メートル進んだところに左へ入る小道がある。この道を入りすぐに大きな道（国道二二三号バイパスへ通じる道）を横切る。太田工業高校の南側の扉にそって続く小さな道を進む。太工の東側を流れる小水路を渡って南東方向に道なりに五〇〇メートル程進むと再び国道に出る。ちょうどこの道の下を流れるのが休泊堀である。橋を越えてすぐ左へ入る道がある。電々公社宅へ入る道だ。この道を入れて五〇メートル程で右の田んぼの中へ続く道がある。この田んぼ道が旧道で、東方向へ約四〇〇メートル進み大きく南東方向へカーブして約七〇〇メートル行くと、太田市電舞の正雲寺の門前近くで国道二二三号とぶつかる。正雲寺のあたりから電舞の街並み約八〇〇メートルをすぎ、電舞歩道橋から四〇〇メートル程進み、再び休泊堀を渡り八重笠地区に入る。国道二二三号バイパスが左後方から本道に合流している。更に六〇〇メートル程進むと左手に山王社の参道の杉の茂みを見、間もなく「邑楽町」の標識が見える。

## 2 石打集落から館林城下太田口へ



電舞東部 休泊堀に架かる橋(橋の上が国道122号)

太田市と邑楽町の境界から約五〇〇メートル程進んだ左側の田んぼの中に旧道あとが、それが道のとてであるとうやくわかる程に残っている。消えた道あとは約一〇〇メートルである。この辺りは、邑楽町大字石打の北西部の小高い台地の部分に当り、南北朝時代に石堂氏が築いた城あとである。石打城の南側の堀に沿って道は続いている。しばらくして右へ入り、堀に沿った道が旧道になるわけである。石打城の堀跡は比較的よく残り、道の右側に約二五〇メートル続いている。石打から足利方面への道を横切り二〇〇メートル程進むと左へ入る道とのT字路に至る。この道を左へつき当たったところが八王子古墳で、その頂に八王子大明神を祭つてある。この辺一帯は松本古墳群と呼ばれ十数基の古墳が雑木と笹藪の中に点在する。松本古墳群の東はずれ、雑木と笹藪のトンネルを抜け出たあたりで現在の道は大きく北へ切れ上って日光脇往還へ合流している。本道は、このあたりから右側の田んぼの中を斜めに進み、日光脇往還を横断し、その先のハヤマ製作所の敷地を通過して国道に合している。

ハヤマ製作所の前から東へ三五〇メートル程で小流を渡る。藤川用水である。橋の名を琵琶首橋という。旧道はこの橋のあたりから北へ折れ豊原の集落へと通じていたという。道は旧藤川城の南側の



藤川城内を走る旧街道

いたが、今は耕地整理により田んぼの中に消えてしまった。

現在、高正寺門前から南へ一〇〇メートル程のところを、東西に走る畔道風の道があり、この道を東へ二五〇メートル程行ったところに橋がある。高正寺門前からこの小橋を結ぶ田んぼの中に消え、羽刈の集落の北側を通り羽刈橋(足利から東京方面へ通じる道=東京道が矢場川にかかる橋)の南五十六メートルのところ、須永商店のあたりに出たらしい。店の前からすぐ南に国道が見える。国道へ出て東へ約四〇〇メートル、千原田の南の小流のところを、流れに沿って斜めに左へ入る。こも田んぼの中で旧状をとどめない。道は国道の北約五〇メートルを国道に並行して走っていた。

現在は、千原田長良神社から国道へ出る道が、国道の手前でクラック状になっている部分約五〇メートル程が旧道筋をとどめているだけで、その先は小字名で長良脇と呼ばれるよく耕地整理された田んぼの中に消えている。田んぼの中を約五〇〇メートル東進(実際は歩けない)すると「開田二十周年記念碑」等が建つ森に出る。こは小字名で大州分と呼ばれるすぐ南側に国道が走り、更に南へ道をたどれば中野方面へ通じている。開田記念碑のとこを東へ一〇〇メートルほど進むと南北方向のかなり広い道とぶつかる。この

堀に沿うような形で東へたどり、集落の東はずれにある高正寺の門前に出て来る。道は高正寺門前をそのまま東方に続いて

## II 道の確定



千原田 長良神社前



うずら 右へ入る道 古河往還



うずらの 旧道(西よりみる)



高根字台の分去り 左へ入る道が古河往還

道が県道中野・御厨線である。すぐ右に「いかつち」の信号機が見える。そのまま県道を横切り一〇〇メートル余り進むと、自然に国道と合流する。合流点から国道を二〇〇メートル程進むと「うずら」の交差点である。

国道と分かれて左斜め前方へのびる道を三〇〇メートル程進む。右の角に商店のあるY字路がある。ここを右へ入る。ここから館林市日向の義民地蔵迄約一キロの間は、ほぼ一本道でアスファルト舗装はされているもの、かなり旧状をとどめている。

義民地蔵尊のところまで再び国道に出て、そのまま国道を六〇〇メートル程進むと、道は大きく南へカーブを始める。すぐ左側の土手状の上を東武伊勢崎線が走っている。この付近は、国道の左側にそって東武線の高架状の土手が残っている。道の左方(北ないし北東)は見通しがきかない。道は、多々良川に架かる沼橋の手前二〇〇メートル程のところを左側へ東武線を越

えて、今は耕地整理された田んぼの中を、東北東方向へ約五〇〇メートル程進み、多々良川の北岸の堤防上に出る。堤防上を一〇〇メートルくらい東へ進むと右下の多々良川の水面に、丸太の橋脚基部が数箇わずかに顔を見せているのが見える。土橋跡である。ここを南側に渡り、南側の堤防を降りると一面の芦原である。枯れた芦の中にわずかに細道がついていて、これが旧道である。堤防から約一五〇メートル程で南北に通ずる未舗装のやや広い道に出る。旧道はこの道を横切り前方(南東方向)の田んぼの中を通っていたが今は消滅してしまった。この辺りは館林市高根字山神裏と呼ばれ、南方の田んぼ越しに大山祇神社の森が望まれる。山神裏の集落を斜めに走る細い道があるが、先程の田んぼの中に消えた道はここにつながっており、山神裏集落を抜けた道は、主要地方道足利・館林線に合流する。足利・館林線を南へ坂を上るように進む。足利・館林線をそのまま南下すると、一キロ足らずで、国

道一三二号と東武線が立体交差する高根跨線橋の下に出る。跨線橋の下から道なりに館林市街地方面へ。道の両側は大街道と呼ばれ、明治二十四年の拡幅工事で現状に近い道幅になったらしく、かなりの道幅である。東武佐野線を越えて約五〇〇メートル右側に「保健所入口」の立看板のあるところが、塚地戸張である。城下町館林から太田・足利方面への出口で番所があった。道はクランク状に屈折していたが、明治二十四年に改修され現在のようになつた。

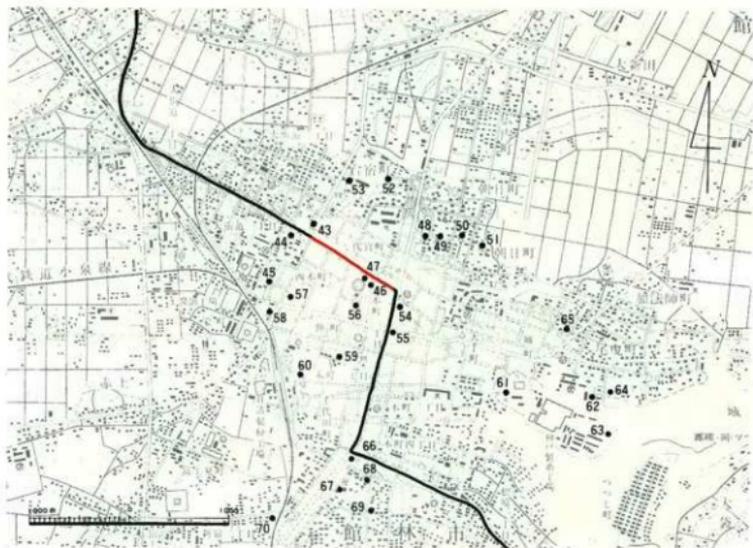
### 3 館林城下太田口から江戸口へ

現在の西本町、法泉寺の付近に太田口の木戸があつて、ここから旧館林城下に入った。木戸跡から東南へ七〇〇メートルほど進むと館林郵便局のある本町一丁目の交差点にぶつかる。ここを右折して本町通りをほぼ南へ向かつて進んでいくが、この部分は佐野・行田線と重複することになる。ここはかつて日光脇往還とも呼ばれ日光への通路としても利用されたという。先程の交差点から一五〇メートルほど行くと、かつて「大辻」と呼ばれた交差点に出る。もと田部井洋服店の脇にあつた館林の道路元標が現在は道路東側の太陽の園の脇に保存されている。大辻からさらに南へ三〇〇メートルほど行くと



館林城下太田口付近の様子

駅入口の交差点がある。この付近が旧城下の江戸口であった。



## II 道の確定

道はやがて鶴生田橋を越えて少し行くと、新宿一丁目の交差点を左折して東へ向かう。六〇メートルほど進むと佐野・行田線のバイパスと交差する。その少し手前、左手に宇沢整形外科の所から細い道が残っているが、これが旧道である。現在、ここは館林から板倉方面への一方通行となっている。この旧道もくの字形に曲って交差点のすぐ東で元の前橋・古河線に合流する。この合流点から少し進むと松原の三差路にぶつかる。ここが追分、道を右にとると赤生田を経て、千津井、飯野方面に出る。古河往還はカーブしながら左の道をとる。この追分に道しるべが建っている。

一本松と呼ばれる樹齢三〇〇年以上という松を左に見ながら現在の道路に沿って進む。約一キロで曹洞宗の古刹善濟寺が左手に見えてくる。その少し

### 4 館林城下江戸口から海老瀬集落へ



古河往還 大辻付近



松原付近の旧道



インターチェンジ付近の旧道



板倉宿はずれの旧道

東に花山入口の交差点があるが、ここから約一キロ北十するとつじの巻所、県立つつじヶ丘公園にぶつかる。花山の交差点からはほぼまっすぐな道を東へ進んで行く。館林五小から約五〇〇メートル行った左手に八坂神社がある。このあたりが本宿である。ここから東へ少し行くと現在の道路は右へカーブしてバイパスにぶつかるが、旧道はそのまま直進する。つきあたりが宝秀寺である。ここを直角に南へ折れるとすぐにまたバイパスに出る。

この付近は昭和四十七年に東北自動車道が開通して以来道の様相が大きく変わってしまった。館林インターチェンジをくぐって少し行くと淵ノ上の集落に出る。そこから旧道は北へ雑形に通っている道である。この旧道もすぐ前橋・古河線に合流することになる。このすぐ先から板倉町に入る。円満寺入口あたりから道は大きくカーブしているが、宝徳院の前を通っている細い道を旧道だという人もいるがはっきりしない。旧道は前橋・古河線に沿って東へ進んで行く。原

宿を経て約二キロの間はほぼまっすぐな道である。大字板倉の信号を左折して北へ七〇メートルほど行くと雷電神社がある。

板倉の町並みも昔の面影がみられない程に近代化されてしまった。実相寺を右手に見ながら進むと板倉東の交差点に出る。ここを右に曲がり谷田川を越えて一・五キロ程行った所が飯野である。現在の道はこの交差点を直進するが、旧道は左折し北へ迂回して四〇〇メートルほどまた合流する。そして二〇〇メートル位でまた旧道に入る。この道はあまり利用されていない部分もあり少し荒れている。この旧道が前橋・古河線に出るあたりの堤防の部分が荒れていて車の通行は不可能である。古河往還は前橋・古河線を横切って堤防上の道をとる。ここから約三キロは谷田川沿いに幅約五メートルの道がつづく。小保呂、上新田通りの集落を通過して、合の川橋の所で現在の道に合流している。しかし、旧道は合の川橋のすぐ手前に河原へ下りて行く道が



板倉宿の町並



堤防上の道

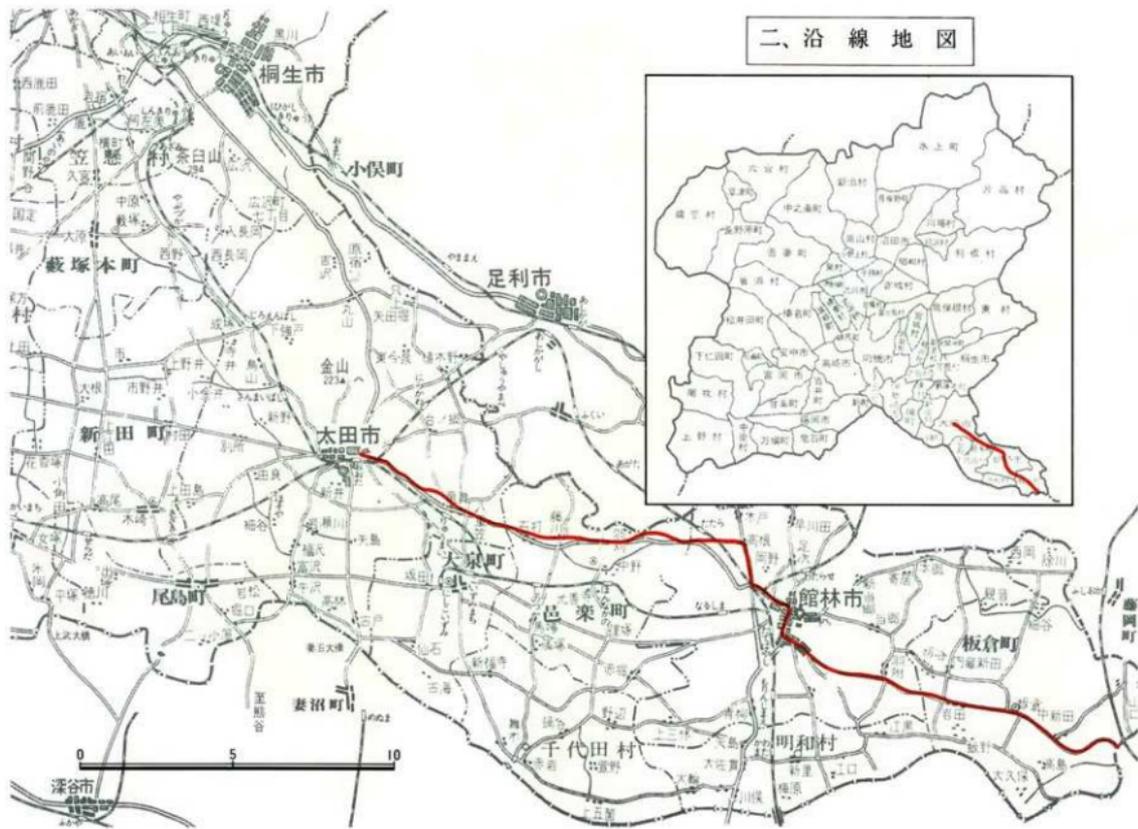
それである。現在は河川改修工事などもあつて道筋はあまりはっきりしないが、中洲に馬頭観音があるのでそれとわかる。川を渡って村岸の堤防には旧道らしき道筋がはっきり残っている。ここからは埼玉県の北川辺町である。往還は前橋・古河線に沿って六キロ程進めば目的地の古河に出る。

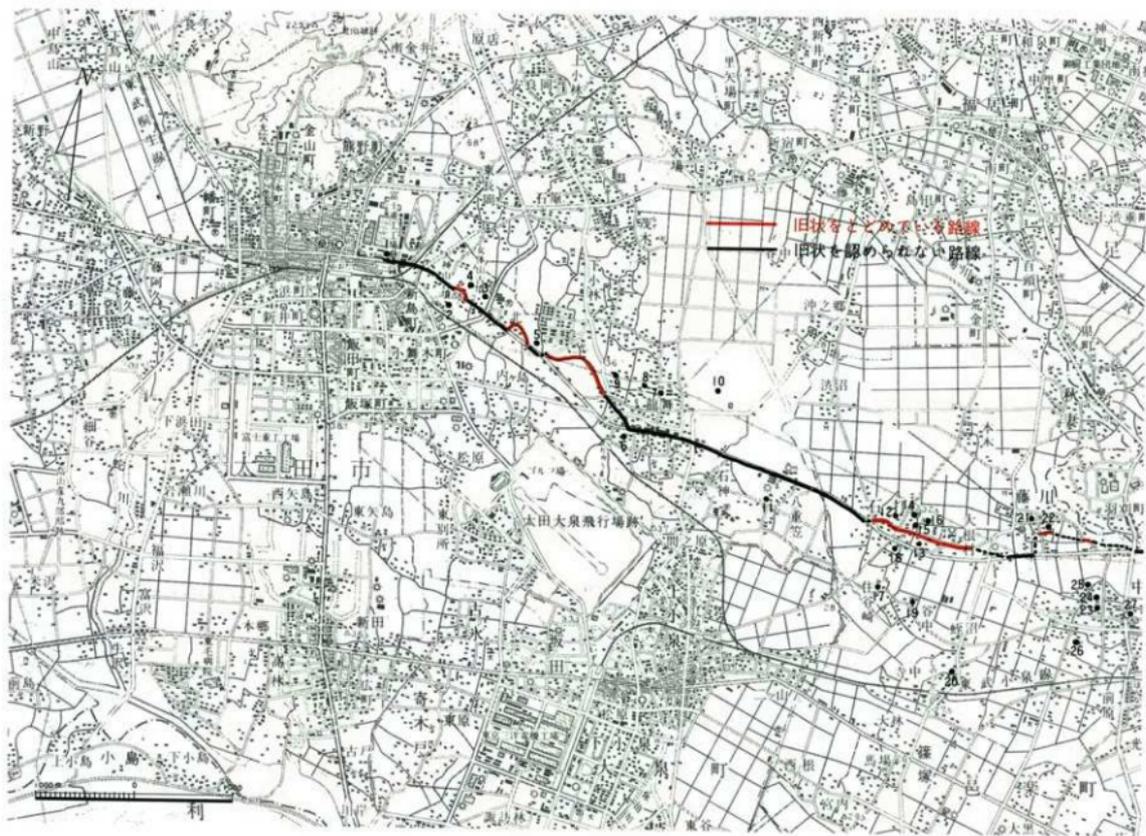


合の川橋付近の旧道

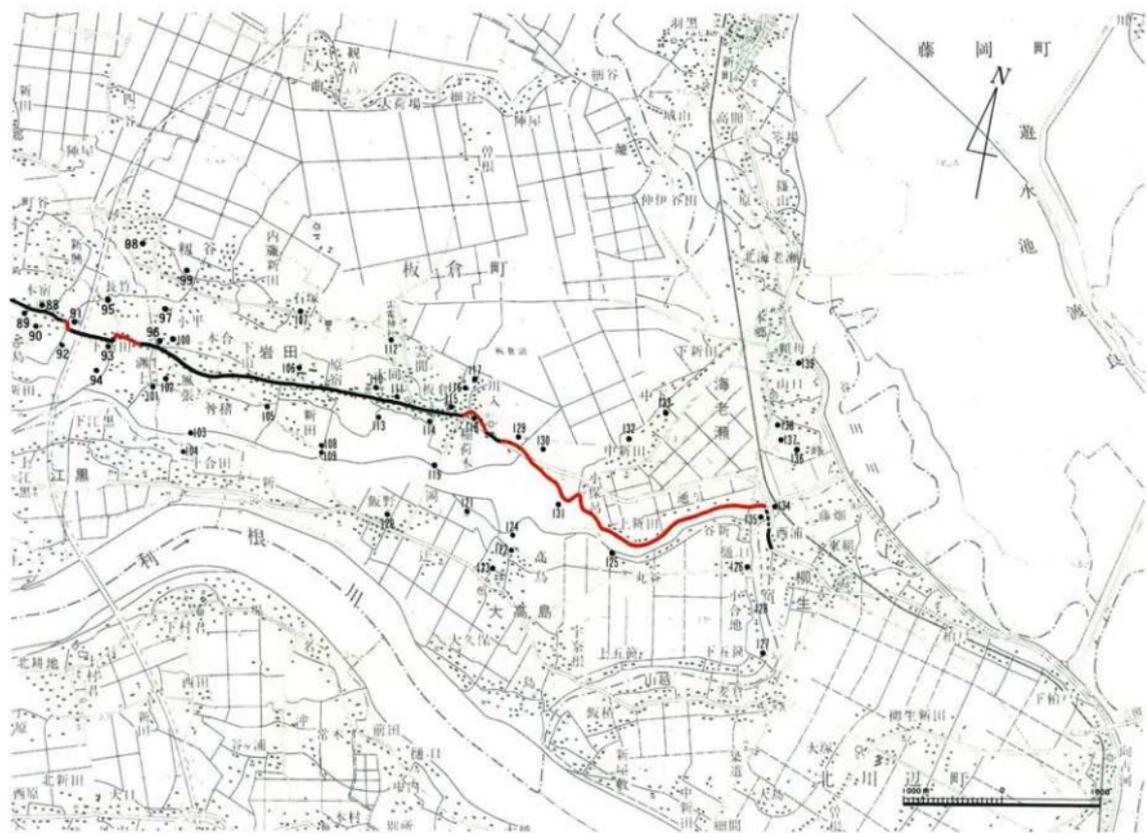


合の川橋









### III 古河往還の現状と文化財

#### 一、太田宿から石打集落へ

日光例幣使街道太田宿の東はずれ、追分地蔵のところから古河往還は始まる。

追分地蔵は約二メートルの御身を、互葺きの覆屋の内にひっそりと置いている。台座に「たてばやし道」「さの道」の文字が見える。地蔵尊の右手前に享和三（一八〇三）年の道標があるが、この道標の造立以前には「お地蔵様」そのものが道標であったのだろう。

地蔵尊の建つあたりは家が建てこみ、これからたどる古河往還も、この辺りは国道二二号線で、かなりの交通量である。

追分地蔵をあとにして、東武鉄道の踏切を越え、街並みを過ぎると、右前方にこんもりした森が現われる。太田天神山古墳である。

天神山古墳は男体山とも呼ばれ、隣接する女体山古墳と対をなしている。

この古墳の規模は、墳丘全長二〇メートル、後円部の径一〇六メートル、前方部の幅一〇六メートル、高さは、後円部一六・五メートル、前方部一〇・五メートルである。周囲には二重の周塼をめぐらせ、墓域は全長三六五メートル、幅は最大二八八メートルに達するという、驚くべき巨大さである。築造時期は五世紀後半と推定されている。この古墳の主はどんな人物であつたらうか。埋葬主体部が長持型石棺という、畿内の大王陵等に専ら使用される型式のものであること、その規模の大きさ等から、古代上毛野地方の盟主



天神山古墳 天神社



太田宿 追分地蔵

的大家族のものであることはまちがいない。天神山古墳の後円部墳丘に接するように国道二二号は直進している。即ち、国道は、天神山の二重の周塼を横切っ

て通っているのである。古河往還は、二重の周塼の中境上に付いていた。現状は、幅三メートル程で簡易舗装が施されている。この道の左側は二重目の塼であつたが、今は塼は埋められ畑になつている。その奥に天神山古墳の陪塚がある。

この道を東へと進む。一旦国道へ戻った道が再び左方へ入るあたり左手に女体山古墳がある。女体山古墳は、直径一〇八メートル、高さ八メートルの墳丘に、一辺一

八メートルの方形の土壇が付設されている。いわゆる帆立貝式古墳である。女体山は、この種の古墳の中では、極めて大規模であり、恐らく五世紀中頃にこの地方を支配していた大豪族の墳墓として築造されたものであろう。なお、天神山と女体山は共に二四センチを一尺とする物指で五〇尺（二メートル）が規準になっていると考えられている。

旧道は国道とわかれて、国道二二二号バイパスとの国道を連絡する道（昭和五十五年度）バイパスがほぼ完成したので、この連絡路の交通量はかなり減少した。を横切り、太田工業高校の敷地の南端にそって続く細道を東へ進む。更に水田の中に続く道を南東方向へ進むと、右前方の国道を走る車の影が次第に近づいてくる。国道との合流点に北から南流する小川がある。これが上休泊堀である。

上休泊堀は、戦国時代末（一六世紀中頃）、多野郡平井、現藤岡市の城主、関東管領上杉憲政の臣であった大谷休泊が、館林へ移住後に、新田金山城主由良国繁とその臣荒山小左衛門らの協力を得て、山田郡内ヶ島地内（現桐生市）から渡良瀬川の水を引いて、現太田市東部から邑楽郡内を灌漑した用水堀である。中世末から近世初頭における上野国内の三大灌漑用水の一つに数えられている。

街道は再び国道とわかれ、左の田んぼの中を東から南へ大きな弧を描きながら、龍舞地区の西北部から次第に南下し、龍舞の街並みの西はずれに近いところで国道へ出て来る。

龍舞はかつて龍舞木といい、小舞木、舞木と並んで「三舞木」と称された。源頼朝により鎌倉に幕府が開かれて間もない建久七（一一九六）年の「大正宮神主注進状（神宮雜書）」に「供祭上分并齋宮寮米濟所上野国〇倉俣処地頭広綱」と見え、これは、上野国内で大藏省領の「保」（庄園とは異なる義）が、伊勢齋宮の寮米を上納する「御厨」に転化したことを意味しているであろう。広綱とは佐貫広綱のことで、佐貫庄の地頭であり、山田郡から邑楽郡に



正運寺本堂



竜舞賀茂神社

かけての地方の支配者であった。龍舞は寮米御厨の後身であったわけだ。

龍舞に入った街道は、国道を東へ進む。龍舞の街並みの入口近くの道の南側に浄土宗開向山正運寺がある。この寺は、天文二（一五三三）年に良意上人によって開かれたと寺伝は言う。街道に面して建っているため北向きである。入口の門柱の手前左右に少し奥まって、子安観音と薬師の二堂宇が建つ。その他享保三（一七一八）年と正徳三（一七一三）年の銘を持つ石の地蔵さんが二体、更に子安観音の御堂の近くに「一善の青面金剛像を刻む石塔があり、特に正徳三年銘のある方の台座には「らくかきんせい」の文字が刻られてあり、当時の人々の心がしのばれる。

正運寺をあとに龍舞の市街地の中程迄来ると、左手に火の見やぐらが見える。その傍らに大きな石鳥居がある。鳥居の右手前の石柱に「郷社賀茂神社」と刻まれている。鳥居をくぐって北へ三〇〇メートル余り、休泊小学校の西隣が賀茂神社である。社伝によれば、貞観三（八六一）年、大納言藤原長良

### III 古河往還の現状と文化財



竜舞浄光寺の五輪塔



塚廻り古墳群

公が洛北賀茂の分霊をここに移し、賀茂明神と称したことに始まる。天明七（一七八七）年勅直により正一位を授けられた。二〇〇〇坪余の境内には、本殿・拝殿・神庫・神楽殿等の社殿があり、雷電社・妙義社・浅間社の三社が境内社として祭られている。なお、当社の祭神は京都の上賀茂社と同じ別雷神である。近郷きつての名社である。

賀茂神社と休泊中学校の間の一角は龍舞館跡（牛蒡屋敷）であった。鎌倉時代初期に、熊野十二坊と称した園田善朝を祖とする園田氏がこの地に来り居住したと伝う。最近迄二重の堀があったというが、今は面影をとどめない。休泊中学校の裏手の道を西へ二〇〇メートル程行ったところに浄光寺がある。この寺は田原藤太秀郷の四男秀純より十五代、藤原秀高が息女の為に尼寺を建てたことに始まり、元弘の頃（一三三〇年代初め）には天台宗であったという。天正の頃兵火にかかり、舜庵全亮大和尚により再建され、以来曹洞宗寺院として今日に至っている。寺城の西側に中世の五輪塔四基があり、

市の重要文化財に指定されている。右端の五輪塔に「元弘」の銘がかろうじて読みとれるのみで磨耗がはげしく判読できない。他の三基も遠りからみて右端のそれと同年代のものと思われる。

賀茂神社入口の鳥居のところへもどり、街道を東へ、龍舞市街地の東はずれ、龍舞歩道橋のところまで本道と交差する道は、県道足利・大泉線である。この道を右へたるとは、約二キロで小泉城跡である。道を左折し約三〇〇メートル程で東へはほぼ直角に曲がる。更に四〇〇メートル程進んだところで、左方を見わたせば一帯の水田である。このあたりは、昭和四十八年から太田東部地区圃場整備が行なわれ、その結果水田の下から七基の古墳が出現し話題になったところである。いわゆる「塚廻り古墳群」である。

昭和五十二年、県教育委員会の調査の結果、六世紀中頃の古墳群と推定され、群集墳の初現形態を示すものといわれる。七基のうち保存できない三基は発掘調査され、四基は帆立貝式と確認され現状保存された。この古墳群の発見の意義は大きく、従来古墳の存在が考えられなかった溷田地帯から古墳が出現したこと、天神山古墳から東部、矢場川古墳群迄の古墳空白地帯をこの古墳群が埋めたこと、四号墳の前方部で発掘された形象埴輪の質の高さと、その人物群、飾馬等の行列の意味するもの等々古墳の研究に多大の資料を提供したものである。

現在この区域は史跡公園となり、案内板も整備されている。

龍舞歩道橋から国道二二号線を東へ一・二キロ程進んだ左側に山王神社の参道が見える。このあたりの右手一帯が八重笠沼である。山王神社参道の反対側の小道を南へ三〇〇メートル入り更に西へ一〇〇メートル程行ったところに正龍寺がある。寺とは名ばかりで、荒れた無住の堂宇と境内の一隅に庚申塔、石地藏等の石造物がひっそりと残っている。

八重笠集落の東側一帯は、かつて相当の広さの八重笠沼を中心とする溷地帯であった。現在は南北に長い二面のプール状の沼に整備され、その回りは

水田化されている。休日ともなると四角い沼のまわりは釣人で賑わう。道が八重笠地区を抜けると邑楽町石打地区である。

国道によって石打地区に入った街道は、石打の家並みに入るところで斜め左へ入って行くのだが、その地点は、北方の渋沼方面から南下してくる道と

国道が交わるY字路の手前<sup>10</sup>〇〇メートルくらいの地点で、現在は国道端の給油所の裏手に幅三メートルくらいの、道の痕跡らしきものが残っているのみである。この消えた道の延長線上に石打城の南の外郭をなす堀にそった旧道がある。



八重笠 正竜寺境内の石仏



石打 二ふ観音入口の道しるべ

石塔四郎を称しているので足利源氏の一派の一人であろう。石堂氏の後、城主は石打氏、北爪氏等の名が知られている。戦国時代には小泉城主富岡氏に属していた

ようである。城跡は、東西四〇〇メートル、南北三〇〇メートルほど。本丸付近は雑木林の中に昔の面影をよくとどめ、土塁や堀跡も比較的よく保存されているが、城の東郭の、現八王子大明神から光明寺の裏手にかけては、宅地開発が進み旧状は失われつつある。

石打城跡のあるあたりは、字家間から字後林にかけての台地状の地形をなし、全般的に低湿なこの地方にあつて島状にとり残された感がある。

石打城跡から東方約一キロ程は、いわゆる松本古墳群と呼ばれ、八王子社の建つ小丘、国道二二号線に面して建つ音原神社の小丘など大小二二基の古墳が確認でき、県史跡に指定されている。

旧道は石打城の堀に沿って東へと進む。堀が切れた辺りで左へ入る道があるが、ここを左折して二五〇メートル程で突き当たった小山が八王子大明神を祭る古墳である<sup>11</sup>。松本古墳群中最大の規模を有し、形状は不明だが、もし円墳であるとすれば、その径五〇メートルはあるであろう。

古墳の頂にある八王子大明神は、古墳の南面につけられた約二〇段の石段を上りつめたところに簡素な社殿を置いている。かつて石打城の守護神として重きをなしたといわれ、地元の人々の信仰も厚く祭礼の時にはかなりの賑わいであつたという。

八王子大明神の南に光明寺がある<sup>12</sup>。光明寺の入口は、先程の左折地点から街道を東へ五〇メートル程の左手になる。門柱に「福壽山」「光明寺」の文字がある。この寺は現在無住で、境内は荒廃しわずかに薬師堂のみが雑草の中にポツ然と建っている。寺の由緒等不明だが、石打城内の東郭にあり城主の祈願所として建てられたとの伝承がある。

光明寺の東隣が、石打城の堀跡をへだたて、慶徳寺の境内である<sup>13</sup>。光明寺入口から慶徳寺入口迄はわずか五〇メートル程である。

道際に、御影石製の門柱が建つ。「曹洞宗」「慶徳寺」の文字がみえる。ここから北へ一〇〇メートル近く、アスファルトで簡易舗装された幅二メートル

### III 古河往還の現状と文化財

ル程の参道が続く。参道の先に山門が見える。この山門は間口五・二メートル奥行三・三メートル高さ七メートルの楼門で、楼上には間魔王等十王が安置され、「閻王殿」の額が掲げられている。「閻王殿」は、冥界の主閻魔王の宮殿の意である。寺は天正元（一五七三）年に鉄翁齋金により開かれたと伝られるが、享保十（一七二五）年に火災に遭い、楼門を残して他は焼失してしまった。楼門は昔の寺の面影を伝える唯一のものとなってしまった。

邑楽町の郷土史家細矢清吉氏は「この寺が、小泉城主の菩提寺であった龍泉院の末寺であったことを思えば、小泉城に関係のある人により建てられたのではないだろうか」と、その著書「中世の邑楽町」の中で述べている。

道は慶徳寺入口から更に東へ、現在部分的に宅地開発の進んでいる松本古墳群の雑木林の中を進む。道の左右の敷の中に、わずかな高みが見られるが、小円墳である。雑木林を抜け出したところで、北東方向へ三〇度くらい折れて



石打城跡付近



松本古墳群の中を走る旧道



慶徳寺山門

行くが、旧街道は右手の水田と雑木林の境目を通り、県道足利・赤岩線（日光臨往還）を横切り、現在のハヤマ製作所の敷地を斜めに横切って国道へ出て来る。この間約三〇メートルは道の旧状を全くとどめない。このあたりは字大根村という。国道一三二号線と県道足利・赤岩線の交差点には「大根村」の標示がある。

石打の南西部には「こ

ぶ観音」で有名な明言寺がある。現国道一三二号線を、石打の市街地に入っ

て間もなくの左側の古墳上に菅原神社が祭られているが、菅原神社の反対側

に南へ入る小路がある。道の入口に「船観世音入口」と刻まれた石碑が見える。碑の下部に「太田一里、館林一里」側面に「小泉二十五町」とある。

明治四十二年に建てられたものである。この小路を南へ進んで四〇〇メートル程進むと小流に突きあたると、流れのすぐ向う側が明言寺の境内である。

明言寺山門へは流れに沿って左方へ回り込めばよい。

月音山明言寺は、元久元（二〇〇四）年天台宗として創建されたが、その後天正二（一五七四）年に曹洞宗寺院として再興されたと伝えられる。本尊は千手観音である。当寺の別称「こぶ観音」は、観音の靈験を説く「子生観音」又は「船観音」の二説話に由来するものであると境内の案内板は記す。

宝曆四（一七五四）年に両野三十三所観音の第六番札所と定められてから入々



石打こぶ観音門前の売店の絵馬



石打こぶ観音本堂

の信仰は益々厚く、参詣人は跡を絶たないという。門前の売店に「子抱き」「おそなえ餅」等の絵馬が並べられている。

こぶ観音をあとに東へ、案内板に教えられたつ四〇〇メートルばかり進むと、谷中の子育観音がある。この観音様には、新田義貞の臣中野藤内左衛門の妻女にまつわる伝説がある。義貞・藤内左衛門ら新田一門は、延元三（一三三八）年越前藤島で戦死した。藤内左衛門の妻はじき夫の霊を弔って髪を下し妙言法尼と号した。妙言尼は夢のお告げにより、亡夫の兜の守本尊如意輪観音（高さ七寸）を祭って夫の回向をしたという。慶長三（一五九八）年東方の押落にあつたお堂が荒廃したので、神藤外記、金井左五衛門がこの谷中の地に堂庵を引き移し修復して諸人札押の霊場とした。宝水五（一七〇八）年廻国の僧亮観により東上州三十三所の札所が設定され、谷中の子育観音はその第九番と定められたという。

1 太田宿から石打集落へ

No.	名称	年号	備考
1	道分地藏	享和三年	台石が道標になっている
2	太田天神山古墳		上に天神祠あり。国指定史跡
3	女体山古墳		国指定史跡
4	天神山古墳陪塚		大谷体泊開さく
5	上体治塚		葦師堂（泉福寺より移す）
6	正運寺	正徳三年	他に享保三年（らくかきんせいの文字あり）
7	青面金剛夜叉像	正徳三年	
8	賀茂神社		藪田氏館跡と伝う
9	龍舞館跡		五輪塔四基（太田市指定重要文化財）
10	浄光寺	元弘年間	七基の古墳、内四基を保存
11	塚廻り古墳群		出土埴輪は県立歴史博物館保管
12	正龍寺	享保三年	境内に数基の石造物あり
13	石打城跡		県指定史跡、大小二基の古墳群
14	松本古墳群		古墳上にあり。石打城の守護神
15	八王子大明神		葦師堂、堂内に多数の仏像あり
16	光明寺	延宝八年	（入口）
17	慶徳寺		四王殿
18	石造地藏尊	元文元年	
19	「不許輩酒入山門」の碑	明和六年	
20	谷中子育観音	明治四二年	明言寺、本尊千手観音 両野三三所の六番 東上州三三所の九番 如意輪観音

二、石打集落から館林城下太田口へ

石打を出て大根村の交差点から県道足利・赤岩線を南へ約一キロ余りのところ、道の右端に蛭沼薬師堂がある。このお堂は、鎌倉時代に諸国を遊行して弥陀の教えを説いた時宗（遊行宗）の開祖一遍上人のお休所と言いつたといわれる。現在、境内は荒れるに任せ多数の石造物が散在している。

道をハヤマ製作所前にもどろう。ここから国道を東へ二〇〇メートル程進み、琵琶首橋のあたりから北へ。旧街道は消滅しているが、藤川城の南外郭線を堀跡に沿って曲折して高正寺の門前へ抜けていたと思われる。

藤川城跡は邑楽町藤川地区（旧藤川村）の中央部宇豊原にある。この城は、小泉城主富岡秀光が佐野城攻略をねらい中継基地として築き、小林河内守義知を置いたと伝えられ、現在、小林氏が城の本郭部に屋敷を構えている。この城は相当の規模だったようで、高正寺は寺曲輪と呼ばれる部分に建てられた城主の菩提寺であり、更にその東方は八幡郭へと続いている。広さは東西五・六〇メートル南北二五〇メートルにも及んでいるらしい。

街道は高正寺門前を東へ、水田の中を斜めに進み、字村東の南東隅で復活する。（この間約二五〇メートルは消滅）復活した街道は字五料の北東部で用水路を斜めに渡り羽刈地内に入ってくる。再び消えた道は東へまっすぐ進み主要地方道足利・邑楽・行田線にぶつかり復活して右に折れ国道へ出てくる。主要地方道足利・邑楽・行田線は、大正時代初期には「東京道」と呼ばれていた。この東京道の旧道は、これより西約一〇〇メートルに残っており、江戸道と呼ばれていたという。江戸道は南下して中野を通り利根川の赤岩河岸又は五箇河岸で利根川を行田側へ渡ったという。

この江戸道を南下し、約五〇〇メートル進むと左に中野幼稚園がある。幼稚園のすぐはす向かいが神光寺である。寺の境内には県指定天然記念物「神



藤川東部 羽刈の旧道



中野神光寺大榎

光寺の「大かや」がある。樹令七〇〇年余りと推定される古木だが樹勢は盛んで、枝張りは一メートル余、南北二四メートルに及び高さ二一メートル太さ目通五・五メートルにも及ぶ巨木である。

神光寺境内は中野城跡で、寺の周辺に土居跡がかなりよく残っている。

永二（二二六）年、新田源氏の里見義俊（後の南総里見氏の祖）の後裔中野景継が築いたものという。景継の子が藤内左衛門景春で、延元三年越前藤島で景春が戦死したため廃城となったが、戦国時代の永祿の頃、小泉城主富岡氏の旗本五田和泉が修築して本拠としていたが、天正十八（一五九〇）年小田原北条氏滅亡と共に廃城となった。

神光寺の北一〇〇メートルばかりのところは梅の宮神社という小社がある。このあたりは字十三坊塚と呼ばれるところの一角で、昭和二十八年頃迄小高い丘になっていて、その頂上に中野藤内左衛門景春の墓を示す供養塔が

あったというが、整地の時に他の墓石類と一緒に埋められてしまったらしい。中野城跡を南へ四五〇メートルほど行った右手に水明寺がある。ここには国指定天然記念物の金木屋がある。かつてはみことな巨木であったというが昭和四十一年九月の台風で根元より倒伏し、再生をはかっているが枯死寸前である。

街道へもどり、国道と足利・邑楽・行田線の交差点から東へ三五〇メートルほど進む。この辺りの両側はよく整理された水田で、特に左側は道隆社と呼ばれている。街道は千原田集落前へ斜めに入って行くのだが、この部分も旧状をとどめない。千原田には長良神社があり、国道から長良神社へ通じる道がクランク状になっている部分に、東西方向のわずか五〇メートルほどに旧道が残っている。ここから東の水田の中へと再び道は消える。

千原田長良神社の西方に小さな火の見やぐらが見える。この火の見下に庚申塔の道標がある。高さ六〇センチばかりの小さなもので、表に「庚申塔」裏に「西太田二里半、東たてはやし一里半余」と二行に刻まれている。寛政九（一七九七）年のものである。旧所在地は不明であるが、この辺りの耕地整理の時ここに移したものであろう。



千原田 火の見下の道標



義民地蔵尊

旧街道は長良神社の南東に広がる水田の中（字長良脇という）を字大州分へと続く。この間五〇〇メートルほどは消滅している。水田の中を東進して来た道が開田記念碑のあるあたりに再び現われる。この辺りは旧街道と並行して国道がすぐ五〇メートルほど南を走っているが、きわめて閑静である。街道は県道中野・御厨線を横切り更に東へ約一五〇メートルほどで国道と合流する。国道へ出て二〇〇メートル東に「うすら」の信号機が見える。邑楽町鴉地内へ入ってきた。

鴉とは愛らしい地名である。この地名については、足利義兼（鎌倉幕府の御家人で野州足利荘の住人）にまつわる伝説がある。

街道は「うすら」の信号で国道と分かれ、左へと入って行く。三〇〇メートルほど入ったところで二手に分かれた道を右手にとれば旧街道である。約二五〇メートル進んで小道を左折し五〇メートルほどの道の角に寛政の文字庚申と馬頭観音がある。

街道は、この辺りでは比較的旧状をよくとどめている。長良神社の鳥居を左にみながら五〇〇メートル余り進むと、道は右にカーブして国道に出て来る。国道への出口に日向の義民地蔵のお堂がある。



義民地蔵尊前の道標



沼 々 多

この辺りは旧多々良村で、義民地蔵から南方一キロ余りに多々良沼がある。かつては広大な沼であったが、干拓工事が進み旧状の三分の程度しか残っていない。多々良は「踏躑」であろう。伝説では、万寿二（一〇二五）年に宝日向なる者が沼の北岸に居を構え、水質の鈍物に適するをもって踏躑を設け鈍物を始めたことによりこの地名があるという。いずれにせよ、製鉄、鈍物に関係する地名であり沼の西方に張り出す鴉小城の

延宝四（一六七六）年二月十五日、館林藩日向刑場において領内の山田郡台之郷（現太田市）の名主小沼庄左衛門ら一八名が直訴の重罪により磔刑に処せられた。時の藩主は後に五代將軍となった徳川綱吉であったが、藩の役人が年貢の横領をたくらみ、「目こぼれ」と呼んで一俵三斗五升のところを一斗も余分に徴して私した。暴政に苦しんだ農民は、庄左衛門を中心に幕府へ直訴を企てたが入れられず、かえって処刑されてしまった。三十年後の元禄十七（一七〇四）年の命日に、日向村で悲業の最後を遂げた一八人の冥福を祈るため、近郷より浄財を集め地蔵尊を建立した。これが義民地蔵である。地蔵尊の安置されるお堂は周囲の建物とその向きを異にする。お堂はその正面をほぼ南東に向けており、その延長線上には館林城がある。

地蔵堂の前の三角広場の電話ボックスの傍らに小さな道標がある。「右足利・左太田小泉」と読める。安永六（一七七七）年のものだが元の位置が少し変更されているようだ。

この辺りは旧多々良村で、義民

地蔵から南方一キロ余りに多々良

沼がある。かつては広大な沼であ

ったが、干拓工事が進み旧状の三

分の程度しか残っていない。多々

良は「踏躑」であろう。伝説で

は、万寿二（一〇二五）年に宝日

向なる者が沼の北岸に居を構え、

水質の鈍物に適するをもって踏躑



日 向 新 田 大 日 尊 道 標

刃りからは今でも鉄滓が出るという。山崎一氏によると、鴉小城の西天狗屋敷とよばれるところに刀鍛冶が住み、ここで鍛えられた良刀が東京国立博物館に蔵されてお

り、戦国の頃の鴉小城は、この辺りで造られる刀剣等の武器等を格納しておくための武器庫の城であろうと推定されている。（写真で見ると邑楽町に鴉古城打康継の刀の写真が掲載されている）

沼ではこい、ふな、うなぎ、なます等の淡水魚を産し、その水は付近の水田を潤している。

沼の北東約六〇〇メートル、日向新田の畑中の路傍に大日尊集会所があり、集会所前の路端に六基の石造物がある。うち三基は道標である。馬頭観音の道標一基は他から移されたものらしいが、供養塔の道標は、正面に「奉読誦、光明寺、光明真言三百万遍、念物一俵〇〇万遍、供養塔」右側面に「石こい、つみ、なかの、左ぬまみち」左側面に「安永八（一七七九）亥年十一月吉日、上州日向村内藤八郎左衛門」とあるので、元から現在地にあったものと思われる。

さて、道を義民地蔵尊のところへもどし東へ現国道を進もう。約六〇〇メートルほどで道は大きく右へ切れて行く。左後方から東武鉄道の高架状の土手がのびてきて、この辺りで国道と接し、そのまま国道と東武線は並んで走る形となっている。したがって左側の見通しは全然さかない。右前方一〇〇メートルくらいに、多々良川に架かる沼橋が見える。街道はこのあたりで



多々良川の土橋跡



高根遺跡

国道と分かれ、東武線を北側へ越えて、北方に広がる水田の中を斜め右方向に進んでいた。明治二十四年迄は旧街道はこの様に通っていたと多々良村誌にある。約四〇〇メートル進むと多々良川の北岸の堤防につきあたる。堤防上をしばらく進み、土橋36（邑楽郡誌にある伊仲湖橋か）を渡って南岸の土手を下り、芦原の中にわずかに残る旧道を南東へ一〇〇メートルほど進んで南北方向の未舗装の道へと出る。街道は今来た旧道の延長約一〇〇メートルばかりで、再び水田の中に消えており、その先にみえる集落（高根字台の北端）の中を斜めに横切り主要地方道足利・館林線に出てくる。この出口のとこに、今は竜興寺の境内にある地藏尊の道標があった。ここから東方約五〇〇メートルに高根遺跡がある。その他源清寺や長良神社も近い。旧街道はここから主要地方道を南下して館林市内へと入っていくのである。足利・館林線を南へ字台の北の坂を上るように約一五〇メートル進むと右へ折れる道



竜興寺の石地藏（高根坂下の分より）

がある。この道を入って大山紙社の前を通り、市営住宅の四つ角を左折して一五〇メートルほど進み更に右折すると、すぐ右手が館林の名刹竜興寺である。

竜興寺の創建については不明であるが、長業寺文書中の三善貞広寄進状及寺領注文に「佐貫庄内高根郷内弘願寺」とあり、この弘願寺が竜興寺の前身であるらしいので、創建は鎌倉時代迄さかのぼるわけである。中世には佐貫庄内の有力寺院として栄え、戦国末には荒廃したが、江戸時代初期には竜興寺として再興されたもののようである。寺には北条氏虎印制札二枚と榊原康政禁制一通（いずれも市指定重要文化財）が残されている。寺の山門付近にはおびただしい数の石造物があるが、中でも門の右手の覆屋内にある地藏尊は出色である。首が胴にめり込むような形のこの地藏尊は、何ともユーモラスである。台石をみると「右足利道、左太田道」中央部に「正徳二（一七一二年）壬辰皇十月十三日、施主高根村、長澤氏」とある。先にふれた旧古河往還と主要地方道足利・館林線の分岐点にあつたものといわれる。

竜興寺の南西、館林市立第八小学校の裏手には幅一〇〇メートル余り、長さ一五〇メートル以上に及ぶ松林が続く。この松林は一名毛せん山37といい、林内のつじの群が、春の開花時はあたかも赤毛せんを敷いた如く、西北方から望まれるところからこの名があるという。又、この松林の中には館林笹（多々良笹）という植物学上の珍種が自生しているという。（館林市の文化財）毛せん山の中程の南、県営住宅のある住宅地の北東の杉木立の中には大谷

III 古河往還の現状と文化財

まれている。(県指定史跡)戦国の頃、上下休泊場の開き、大谷原の開墾及び植林、成島の新田開発等で、休泊の事蹟は特筆さるべきものばかりである。街道へもどうう。大山祇神社、市営住宅への入口のところから南へ進む。約四〇〇メートルほど行った右手に小祠が見える。地元では「大神宮様」と呼んでいる。ここから更に六〇〇メートル程で高根の跨線橋の下に出てくる。この部分は、今来た古河往還と国道二二号線が、東武伊勢崎線をまん中にはさんで十字状に接する形になっている。上の跨線橋は東武線を越えて古河往還(現足利館林線)と国道を連絡するものである。跨線橋の下から右に東武線を見て東へと街道は進む。道の両側には次第に家が立て混んでくる。道の交通量も相当なものだ。約一キロ程市街地へ入ると、右手に「保健所入口」の立看板が見える。この地点が、藩政時代の城下町館林の北西の関門で塚場戸張(旧町名は塚場町といった)という。館林の五つの木戸の一つで太田口木戸とよばれ、日没後は木戸を閉じ、通行手形を持つ者のみ出入を許可したという。(宮形家公用品誌、邑楽郡誌)道幅も現在よりは大きく、城下町の常で、この部分はカギの手に屈折していたというが、明治二十四(一八六一)年の道路改修で現状に近いものになったという。町名も塚場町から大街道という俗称から起った町名に変わった。



向原の大神宮様

休泊の墓がある。<sup>(1)</sup>  
この墓碑は高さ六  
六センチ幅三四・  
五センチで舟型の  
背面のもので「円  
寂大谷休泊関月居  
士、天正六(一五  
七八)戊寅天、八  
月二十九日」と刻

№	名称	年号	備考
20	経沼薬師堂		「通行上人休所」
21	藤川城跡		
22	高正寺		門前に石仏数基
23	神光寺大かや		県指定天然記念物
24	中野城跡		
25	梅の宮神社		中野景春の墓所跡(カ)
26	石灯ろう二基	宝曆九年	他に寛延二年
27	永明寺の金木庫		国指定天然記念物
28	中野耕起源地之碑		
29	千原田長良神社		
30	庚申の道標	寛政九年	
31	庚申席及び馬頭観音	寛政五年	
32	鶴の長良神社	元禄一七年	
33	安水の道標	安永六年	
34	多々良沼		
35	大日尊集会所		
36	道標三基	天保二二年	戦国の頃の刀剣(東博蔵)
37	土橋		馬頭観音と複合(高さ一メートル)原位置不明。他に馬頭観音と複合(安永八年)。天保六年、供養塔と複合(安永八年)の坂下に架かっていた。今は水面にも高根字台の坂下にあった古墳あり
38	竜興寺境内地藏道標	正徳二年	附近より土器、石器が出土する
39	竜興寺		北条氏虎印制札一通
40	館林笹		榊原康政墓制一通
41	大谷休泊の墓	天正六年	館林市指定天然記念物

2 石打集落から館林城下太田口へ

42	大神宮様祠 青面金剛	享保二〇年 享保二年	常夜灯
----	---------------	---------------	-----

### 三、館林城下太田口から江戸口へ

旧太田口付近に法泉寺がある。法泉寺から東へ五〇メートル進み、愛宕寺司馬の、中世に小田原街道と呼ばれた路地を一〇〇メートル入ると愛宕神社(44)がある。

社殿は、旧館林町で唯一の古墳上に鎮座している。ここには、武田信玄、穴山信君の書状や、徳川綱吉自筆の「声鷲図」が所蔵されている。

境内には、県指定重要文化財の青石地藏板碑がある。俗に道六神と呼ばれ、明治初期までは、わらじなどが碑前につるしてあったといわれる。

愛宕神社前の旧小田原街道を南に一〇〇メートルほど行くと応声寺がある。



応声寺 館林城 鐘



旧塚場町の民家

伝によると、鎌倉時代遊行二代真教和尚が建てた念仏道場がその始まりといわれる。

境内の鐘楼に、県指定重要文化財の館林城鐘がつるしてある。この城鐘は、寛文十三(一六七三)年館林藩主徳川綱吉が城内や城下に時を知らせるため、天命(栃木県佐野市)の長谷川次郎左衛門に鑄造させたものである。鐘の銘文は、林羅山の子春齋の選によるものであるが、綱吉の子徳松丸が病没し、天和三(一六八三)年に館林城が廃城となった時、銘文がつぶされて応声寺に下げ渡されたものである。

その外、夫婦地藏と呼ばれるはしか地藏二体や抱衾神等の石仏がある。

古河往還に戻り、旧塚場町の通りを東へ進む。この通りには、古いたたずまいを見せる民家が残されている。三〇〇メートルほど行った所で川魚料理屋脇の路地を南に少し行くと普賢堂が右手に見える。その奥に常光寺がある(45)。

常光寺本堂の内陣と外陣の格天井は、館林出身の南画界の巨匠小室翠雲の若き日の作品である。また境内にはやや風化して年代はわからないが阿弥陀三尊の石仏がある。

旧塚場町の通りに戻り東へ一〇〇メートルほど行くと館林郵便局のある交差点に出る。直進すると館林城の大手門



法輪寺の石仏

### Ⅲ 古河往還の現状と文化財

跡である三角公園がある。

左折して日光輪往還を北に五〇メートル進むと、右手に背面金剛群のあ  
る熊野神社がある。この一画には、曹洞宗の法輪寺、日蓮宗の法高寺、円教  
寺がある。この内、法輪寺は、明治維新の時に小栗上野介の首が群馬郡植田  
から館林に送られ、東山道総督岩倉具定の首実験に供された後、小栗上野介  
父子の首が葬られたが、一年後に上野介の道臣に盗み出されている。

熊野神社から北へ五〇メートルほど進み、台宿の信号を左折して西へ一〇  
〇メートルほど行くと五宝寺がある。

五宝寺は、新義真言宗豊山派に属する寺院であり、中本寺常法檀林の寺格  
を与えられていた。門前の両脇に明和年間に作られた形の整った常夜燈があ  
る。境内には、県指定重要文化財の不動まんだら板陣がある。墓地に入って  
すぐ右手に、「利根川の久久保河岸（板倉町）」を開き、「利根川の水は尽きても  
高瀬の金は尽きない」といわれるほどの財をなした高瀬善兵衛の墓がある。  
五宝寺の西に長良神社がある。この付近は、館林城主居や堀が比較的良好  
に残っている。

館林郵便局の交差点を右折し、本陣跡を東に見て一五〇メートル南に進む  
と大辻に出る。

ここは、札の辻と呼ばれたところで高札場があった。東南隅にある太陽の  
間に大正十四年頃建てられた館林町の道路元標が置かれている。

大辻を右折し西に旧村木町の通りを五〇メートル行くと、群馬しよんの  
北側に千眼寺がある。そこから四五〇メートル進むと右手に観性寺がある。

観性寺には、鎌倉時代の阿弥陀三尊の石仏があったが、風化がひどくなった  
ので、保護のため館林図書館で保管している。その外この地方では珍しい天  
保十四（一八四三）年の二十三夜塔がある。

観性寺から三〇メートルほど先に、この地方では数少ない浄土真宗の覚応  
寺がある。



館林町大辻の道路元標

年の地藏などがある。

大道寺から一〇〇メートルほど西に進んだところでキンカ堂の西側に善導  
寺がある。ここは、東武鉄道館林駅を降りてすぐそばである。

善導寺は、終南山見松院善導寺というのが正しい呼び方である。山門に「勸  
願所」と記してある大きな扁額がある。これは、明治二年に勸願所の論旨を  
下賜されたことによる。善導寺は、江戸時代関東十八檀林の一つであった。

当時、檀林で修業しないと僧侶の資格を与えられなかったのである。ここで  
修業した僧は、増上寺山主となった祐天上人をはじめとして数多くの名僧が  
いる。戦前使用された修身の教科書巻四の「兄弟」は、渡辺華山の弟が善導  
寺へ寺奉公に出る時の話である。

榊原氏の菩提寺となったため、県史跡の榊原康政の墓をはじめとしてその  
一族や、老中松平乗寿の墓がある。寺宝として、榊原康政像や伝徳川家康自  
画像などがある。

再び大辻を南に三〇〇メー  
ル進み、自転車屋の脇の路地を西  
に二〇〇メートル進むと、右手に  
大道寺がある。

大道寺は、後述する善導寺の役  
寺である。

大道寺には、江戸時代の国学者  
で天保八（一八三七）年越後国柏  
崎で乱を起こした生田萬の父祖の  
墓がある。その外、幕末の侠客江  
戸屋虎五郎の墓がある。石仏では、  
たわむれる二人の男女の側で泣く  
童子を配した享保六（一七二一）



館林城跡



尾曳神社遠望

古河往還に戻り、一〇メートルほど行くと館林駅入口の交差点に出る。左折して観光道路を東へ六〇メートル進むと館林城跡である。<sup>(6)</sup>

土居がよく残っているのは三ノ丸跡である。ここには図書館と郷土資料館がある。

資料館の東側に旧上毛スリン本館があった。これは県指定重要文化財となっており、明治中期の洋風建築の特徴がよく表われている。館林市役所建設のため、近くの館林女子高の東側に移され第二資料館となっている。

第二資料館の東南につつじヶ岡第二公園がある。つつじヶ岡第二公園の一角に佐貫氏関係の墓と考えられる五輪塔が多数安置されている。これは、昭和四十五年旧館林城跡から出土したものである。北東に尾曳稲荷神社がある。<sup>(64)</sup>

尾曳稲荷神社は、戦国時代赤井照光が助けた狐の教えによって、館林城を築いたことから、狐の恩に報いるために創建したという伝えがある。境内に

は、徳川綱吉の館林城修築にたずさわった石工の寄進になる寛文五(一六六五)年の石造水盤、鹿城の工事にたずさわった石工の寄進になる天和三(一六八三)年の石灯籠があるのが興味深い。その外、館林城図絵馬等がある。また、明治の文豪、田山花袋の歌碑が三ノ丸公園から移転されている。尾曳稲荷神社の北西五〇メートルほどの所に、田山花袋の旧居がある。この建物は、木造茅葺であり、明治維新前の武家屋敷の面影をよく残している。ここで、花袋は九才から十九才まで過ごした。

3 館林城下太田口から江戸口へ

No.	名称	年号	備考
43	法泉寺	寛文一年	榊原重次之墓
44	受岩神社	文永一〇年	青石地藏板碑
45	応声寺	明和五年	館林城鐘(県指定重要文化財)
46	普賢堂	明和五年	普賢菩薩
47	常光寺	寛文八年	格天井 阿弥陀三尊
48	熊野神社	寛文八年	青面金剛群
49	法輪寺	元禄六年	四魔大王
50	法高寺	安永六年	馬頭尊
51	円教寺	安永六年	六百遠忌報恩塔
52	五宝寺	永仁五年	不動まんだら板碑 (県指定重要文化財)
53	長良神社		高瀬善兵衛墓 常夜塔
54	足利町通り		古兜
55	大辻		本陣跡
56	千眼寺	明和六年	道跡石標
57	観性寺	天保四年	十九夜念仏供養塔
58	寛応寺	天保一年	不動明王
59	大道寺	天保四年	二十三夜塔
60	善導寺	寛文一五年	安産観世音塔 生田万父祖の墓 榊原康政墓(県指定史跡)

III 古河往還の現状と文化財

新宿一丁目の交差点の南角に竜泉寺がある。境内には元禄元(一六八八)年の像庚申などがみられる。その少し南、遍照寺の墓地圖に釈迦堂と呼ばれる小さなお堂が建っている。ここには元、宝寿寺という寺院があったが、廃寺となり現在は常光寺の管理になっている。この釈迦堂には毎日曜日に近所の年寄りが一〇人、二〇人くらい集まって念仏講を行なっている。お年寄りにとっては信心と合わせて雑談の場としても楽しみなもののように感じられる。

先程の交差点をそのまま南へ一キロほど行った右手に入る道角に「富士浅間入口道」と書かれた高さ約一メートルの道しるべが建っている。ここから富士嶽神社までは約一キロである。

また元の場所に戻り前橋・古河線を東へ直進して行く。宇沢整形外科の所から入る旧道は現在の道路状況から考えると近い将来なくなってしまうことも予想される。この交差点より北へ少し行き右へ花山方面の道を入った所の瀬山氏の庭内に「石花屋満、左のやまみち」と書かれた享保二十(一七三五)

四、館林城下江戸口から海老瀬集落へ

65	田山花袋旧居	第二資料館に移転の計画がある
62 63	三ノ丸公園 第二資料館	館林城跡 田上モリスリン株式会社本館 (県指定重要文化財)
64	つつじヶ岡第二公園 尾曳稲荷神社	五輪塔群 絵馬 石造水盤 常夜塔 田山花袋歌碑
	寛文二年 天明三年	



遍照寺



富士嶽神社への道しるべ

るが年代は不詳である。もう一つは三差路の手前左側の瀬山増男氏の墓庭にある。正面に南無観世音菩薩と書かれ、両側面に「秩父、こが江」(西國、せんづい)と刻まれた元文三(一七三八)年のものである。

追分から道を左にとってすぐ左手に一本の大きな松がある。説明によれば

年の地藏尊が建っている。これは、現在では全く個人の庭の中にあるが、この脇を花山へ通じる道があったことがわかる。現在でも一部ではあるが、はっきりとそれと確認できる。こうした石仏を大切に保存しておけば重要な歴史の資料になるといふ一つの事例といえる。

松原二丁目の三差路(追分)には二つの道しるべがある。一つはガソリンスタンド脇のちようど分岐点にあたる所に高さ一メートル以上の角柱が建っている。これは

道路工事の際に五〇センチぐらい埋没してしまったそうだが、あまりにも無神経な話である。正面に「右急くる、せんづい」と深く彫られてい

樹令三〇〇年以上という古い松で、安政年間、この付近一帯は松林であった。それで、「松原」という地名もそれに由来してつけられたという。なお、このすぐ北に旧松林寺跡があるが、この名前などからも推定することができよう。この一本松から道なりに東へ行くと左手に曹洞宗の古刹、普濟寺がある。寺域もかなり大きく往古の繁栄ぶりがうかがわれる。寺伝によれば徳川家康より寺領として朱印百石を賜ったという。さらに、十三世淳峯の代には大本山水平寺より常恒会地の免牒を得たといわれる。大永五（一五二五）年の創立で古い茅葺きの山門を入ると、すぐ左に大きな手洗鉢がある。これは館林藩の検断職をしていた青山氏の寄贈になるものである。また、右手の銅鐘は館林市の指定重要文化財にされており、慶安一（一六四九）年の銘があり、佐野の住人横塚内膳、藤原重次らの鑄造したものである。なお、中興開山五世花翁は長尾為景の四男にあたるという。



郷倉跡

(29)

花山入口の信号を左折し、北へ一キロの地点に県立つつじ丘公園がある。毎年つつじの開花期には大勢の花見客でにぎわう。すぐ裏手は城沼があり東毛きっての景勝地といえる。この付近の大袋には館林城



一本松

の前身ともいえる大袋城があった場所である。花山入口へ戻る道の左奥に江戸時代の郷倉がある。現在は荒廃するにまかせたままなので惜しい気がする。往還に戻り、市立第五小学校の手前を右折する道があるが、これを五〇〇メートルほど入った所に子権現がある。ここは足の病に良く効くといわれ信仰されていた。このあたりの地名を「子之神」と呼んでいる。この道をさらに南に下って行くと赤生田の集落に出る。ここには秋元生祠がある。また、少し西へ行った三差路には庚申塔が建っている。ここは秋元生祠がある。寛政十二（一八〇〇）年の建立で、「右 せんすい廿三丁、いのへり 左 いたくら（へり、こがへり）」と刻まれている所から裏往還であったと考えられる。この三差路を北西へずっと行くと先程の松原の追分に出るわけである。館林五小西側の道を北へ入って行くとまもなく左手に古い民家が見える。家の新築が急激でこうした光景はあまり見られなくなってしまった。この家も間もなく取り壊わしてしまうそうである。この道を北へ行き、つきあたりが浅間神社である。この神社は古墳の上に祭られている。もとは前方後円墳であったが、現在は前方部が欠損してしまった。鳥居をくぐるとすぐに形を整った常夜塔がある。嘉永三（一八五〇）年のものである。また、右手には享保八（一七二三）年の背面金剛像や文化元（一八〇四）年の如意輪観音な



浅間神社の常夜燈

### III 古河往還の現状と文化財

どがある。

そして、館林五小の裏を通る細い道を東へ行くと変形の三差路に出る。この西隣に二つの道しるべが建っている。一つは文政九（一八二六）年の銘があるもので白石に「東こが江、西たてばやし江、南せんづい江」と刻まれている。もう一つは文政十二（一八二九）年の銘があるもので「東、板くら、らいでん道、南子こんげん、十二社道」と記されている。このことからして三差路付近の狭い道で往還とはは並行しているこの道は、裏往還として利用されてきたと考えることができよう。また、この辻のすぐ北に他宗場と呼ばれる真言宗と曹洞宗の墓地がある。地元ではこれを「タシバ」と呼んでいるが、他の地域にはあまり例をみないのではないだろうか。

本宿の八坂神社の手前、道の右、ガソリンスタンドのすぐ西隣に小さな祠がある。現在では何の変哲もない祠だが、道祖神が祭られていたという。洪水の際にここに流れついたのでお祀りしたという話もあるが定かではない。こうした荒れた祠を見ていると徒歩の時代に旅人の安全を祈ったと考えられる。こうした信仰の様式も自動車時代には無用のものとして忘れ去られていく運命にあるのであろうか。

旧道を入ったつきあたりにあるのが宝秀寺である。境内には年代不詳ではあるが道しるべが一つある。「正面たてはや志、左ふじおか道、右こがみち」とあり、右折して現在のバイパスに出るとこの付近は東北自動車道の開通にもなってインターチェンジが出来たこともあって様相が一変してしまつた。四車線の広いバイパスが通り、高速道によって道が分断されてしまつたものもある。高速道をくぐるすぐ手前を右折し、少し西へ行った畑に馬頭観音が七基建っている。像塔は一基で、これが最も古く明和五（一七六八）年のものである。

高速道をくぐってインターのすぐ東、道の右手角に西国供養塔の道しるべが建っている。明和三（一七六六）年の銘があり、「西たてばやしみち、北こ



馬頭観音

加みち、東いのかしみち、南せんづいみち」とあるので旧道は北へ入る道に行くことになる。道は左へカーブしながらそのまま行く小さな四辻に出る。この

東角に高さ約二メートルの大きな道しるべがある。如意輪観音を彫刻し、十九夜供養塔と陰刻してあるもので白石に

「向（西） あこうだ、せんつる

向（北） すぎのわたし、たてばやし

向（南） いいのかし、こが」

と刻まれている側面に天保十二（一八四一）年の銘がある。ここも昔はかり利用されていた道であることがわかる。

また、先程の西国供養の道しるべを南に少し行くと、田んぼの真中に円く堀がめぐらしてある小さな島がある。その中に巳持供養塔があるが、これはこの地方に多くみられる水神を祭つたものと思われる。

旧道をくの字形に入ってまたすぐ前橋・古河線に出てすぐ板倉町に入る。そして湖ノ上に入る道を行くと釈迦堂の所へ出るが、そのすぐ南に舟山古墳がある。また、すぐ隣の風張地区には筑波山古墳がある。ここにはフズリナの化石のある珍しい石が石室の天井石となっている。

円満寺へ行く参道の左手には、倒れかかったような道しるべが二つある。

一つは庚申の道しるべで「石たかとり、こ加、左らいでん道」と刻まれた万延元（一八六〇）年のもので、もう一つは十九夜塔で「右いたくら、こが」と



正明院跡 石仏群



円満寺前道しるべ

白石に刻まれている。造立は嘉永七(一八五四)年になる。円満寺にある千手観音像は重要文化財に指定されているもので地方ではあまり類を見ない美しい顔立ちをしている。この寺は現在住職がいなかったため地元の人たちによって管理されており、千手観音は二十一年に一回公開されるといって秘仏で、安産、子育ての観音様としても知られ御開扉の時には近在近郷だけではなく遠方からも見物客がやってくるという。また、本堂も安政六(一八五九)年の棟札から相当古いことがわかるが、雨漏りがするようになったため昭和五十五年大々的に屋根のふき替えを行なった。この千手観音は一説によると鎌倉末・南北朝に地元の家

族の援助で作られたものだということである。円満寺の一本束の通りに面して宝幢院の小さなお堂がある。その脇に珍しい勝軍地蔵が建っている。馬にまたがった人物が僧形で享保十二(一七二七)年に宝幢院盛營によって造立されたものである。円満寺の北、椋谷地区には安勝寺がある。ここには

北朝期に地元の家族の援助で作られたものだということである。円満寺の一本束の通りに面して宝幢院の小さなお堂がある。その脇に珍しい勝軍地蔵が建っている。馬にまたがった人物が僧形で享保十二(一七二七)年に宝幢院盛營によって造立されたものである。円満寺の北、椋谷地区には安勝寺がある。ここには



原宿下 水 神 塔

年の十九夜供養塔、安永五(一七七六)年の普門供養塔などがきれいに整理されている。また、この道をさらに北上すると石塚地区に出る。この最勝寺墓地には

美しい銅鐘や、江戸中期頃の建築といわれる阿弥陀堂、鎌倉末期の阿弥陀如来像さらに「亀の子様」と呼ばれる亀の背中にのった珍しい宝篋印塔などがある。また、寺の東、城之宮神社に行く途中に正明院の墓地がある。現在、寺は存在しないが、ここに珍しい青面金剛像がある。文政六(一八二三)年に作られたものでドクロの面と三猿に特徴がある。この地方には青面金剛の頭にへびをまきつけたものやこの場合のようにドクロを表わしたものが目につく。多分これは東毛の特徴と考えられるが、水神の信仰と結びついたものであろうか。また、三猿も普通小さく抽象化したものが多い中で形も大きく、ユーモアを感じさせる。往還はほぼまっすぐに東へ進んで行くが、南へ折れ斗合田橋付近には堤防上に水神祠が建っている。また、橋を渡ってすぐ左手の林の中に馬頭観音や板碑が数基並んでいる。地形などからしてこの場所は特殊な意味あいがあるのではないだろうかと思われる。骨橋という集落を東へ細い道が走っている。この道が御獄社の近くの三差路につきあたる。この角には百番供養の道しるべが建っていたが、交通のじやまになるためか、観福寺に片付けられてしまっ

た。現在には白石を残すのみである。境内には明和二(一七六五)年の十九夜供養塔、安永五(一七七六)年の普門供養塔などがきれいに整理されている。また、この道をさらに北上すると石塚地区に出る。この最勝寺墓地には

### III 古河往還の現状と文化財

珍しい墓石が数体ある。山伏と巫女の墓である。

原宿下の公民館入口の信号を右折し約一キロほど行くと三差路になる。この三差路の角に水神塔の道しるべが建っている。安永九(一七八〇)年のもので「西たてばやみち、北いたくら村みち」と書かれてある。また、このすぐ北のボンボ小屋脇には通称「イボ地藏」と呼ばれる大きな地藏菩薩が建っている。享保四(一七一九)年の銘がある。そのすぐ隣には水神塔と同じ年に建てられた馬頭観音がある。ここから谷田川を越えれば間もなく飯野である。

元の道へ戻り東へ少し行くと板倉高校が左に見えてくる。そのすぐ東隣に宝福寺がある。ここは東上州三郡、阪東第一番札所で安産子育ての板倉観音と呼ばれる。現在、町が管理している県指定の重要文化財になっている木彫性信上人坐像が安置されている。鎌倉期の作といわれるなかなかしつかりした像である。なお、性信は親賢の愛弟子の一人で、この地方の布教活動の中心人物であった。また、学校の南にある墓地には文政六(一八二二)年の札所案内の道しるべがある。「龍藏寺へ三丁、観福寺へ六丁」と刻まれている。

宝福寺の少し東を往還から南へ入った畑中の辻に馬頭観音の道しるべがあり「これより左、らいでん(道)」とある。往還に再び出て東へ二〇〇メートルほど行った左手の旧道入口に自然石の「是より、らいでん」文化十一(一八一四)年の文字が刻まれている。この参道は細くて曲りくねっているため、雷電神社に行くには荻野商店の所を左折し、北へ約七〇〇メートルほどで着く。

雷電神社は、創建年代は不詳だが、棟札によれば天文十六(一五四七)年、慶長十六(一六一一)年、寛文四(一六六四)年に大改修が行なわれ、五代將軍綱吉の時に菱紋の使用を許されたという。現在の拝殿及び本社は文政二(一八一九)年の建築にかかる。なお本社の手裏にある末社八幡宮・稲荷神社社は国の重要文化財に指定されている。雷電信仰はいまでも水と

の関係が深い。このあたりは「蛙が小便しても水が出る」といわれるほど水との関係が深い。むしろ雨乞いではなく天気まつりをするという。また、関東一円に多くの分社をもち、多くの人々が「雷電講」と呼ぶ講を作って参詣に来る。

なお、板倉の芸能として里神楽がある。通称「火男踊り」と呼ばれ、地元有志によって保存されている。

大字板倉の信号の東、左手に八坂神社がある。ここは現在でも獅子頭をもって各戸をまわっているそうである。こうした風習も最近はだんだんみられなくなってきた。そこから一〇〇メートルばかり東南、往還より少し入った所に実相寺がある。寺入口の右側に背面金剛などが数基並んでいる中に、白石に「石こが」と書かれた元文五(一七四〇)年の庚申の道しるべがある。また、本堂には木彫の勝軍地藏が安置されている。

往還の左にある荻野家はこの地方の旧家で江戸時代は惣代名主をつとめた



板倉雷電神社入口の旧道



実相寺

という家柄である。荻野家には沢山の古文書、延享二（一七四五）年の絵地図、さらに、天正十一（一五八二）年の銘がある阿弥陀如来坐像（県指定重要文化財）を持っている。像の裏には大野姓が書いてあるが、これは豊臣家についた先祖が、江戸時代になって土着し、荻野姓に改めたのだということである。

板倉東の信号を旧道に入って間もなく北へ上る細い道があるが、これが板倉沼に出る道である。板倉沼はすでに江戸中期頃から開発が進んでいるが、以前は東西十二町、南北八町という大きな沼であった。この道の左手奥には



板倉沼への運河跡



脇侍をもつ青面金剛像

板倉沼へ通じていた運河跡があるが、これも間もなく消えてしまおうという。また、つきあたり

の右手奥の民家の庭隅に水神祠が三基ばかりある。

先程の信号を右折して藤木橋を渡る右手前に水防小屋が堤防上にある。中には水害に備えて土のうなどが置いてある。しかし、今では各所に排水機が来たので、それを使う機会も

ほとんどなくなつた。谷田川を越え一キロ程南西に飯野の地藏院がある。こゝはヒキハカとウメハカのいわゆる両墓制の跡をとどめている。この地域にはもう一か所、下五箇にやはり両墓制がみられる。また、地藏院の墓地にはかなり立派な不動明王像がある。この飯野は江戸時代には利根川の水運を利用して河岸があつた所である。

飯野の東、高島には天満宮がある。裏の池などからしても一時は相当繁栄したものと思われる。また天満宮のちよと真裏にあたる堤防下の馬捨場行人塚には寛延二（一七四九）年の地藏尊や文化十一（一八一四）年の馬頭観音などがある。天満宮に行く途中左手に学校があるが、その北側三差路に庚申、青面金剛像が三基ある。そのうちの一基は元禄十六（一七〇三）年のもので脇侍二体をもつ珍しい形である。

高島から北東へ一・五キロほど行くと丸谷という集落に出る。集落の一番西の堤防下に長良神社があり、その横の草むらの中に大変形の整つた元禄十二（一六九九）年の勝軍地藏がある。そこからまた東へ一・五キロ行った所に金蔵院がある。こゝは聖天様や大杉様を祭っている。お堂の脇には庚申塔が数基並んでいる。また、この金蔵院の少し北から利根川にかけて古利根の旧河道をはっきりと見ることができ、もちろん現在は全く水は流れていないため、そこを利用して水田などに使っている。

だいぶ往還からそれしてしまったので、また元の板倉東の交差点まで戻り旧道を四〇〇メートルほど行って現在の道に合流し、二〇〇メートル先左に長良神社へ入る旧道がある。こゝは昔、「椿の森」と呼ばれ板倉の東はずれにあつた。この旧道は道幅も約三メートルで狭いためあまり利用されていないようである。この道は前橋・古河線を横切つてそのまま堤防上の道につながつてゐた。このあたりの北には旧堤防のそばに、板倉縄文遺跡がある。海老瀬地区に沢山みられる貝塚との関連も考えられる。

旧道はそのまま通りまでは堤防上に行くことになる。このあたりは水害な

### III 古河往還の現状と文化財



利根の旧河道



水塚のある家

どによりしばしば河道が変化したと思われるが、この堤防上の道はある程度安定した道として考えられていたであろう。藤岡方面との分岐のすぐ手前河川敷の中に小保呂貝塚がある。

また、藤岡方面へ向かって北東へ一キロ程行くと中新田、中下の集落に出る。このあたり一帯は水害に備えて作られた水塚が沢山みられる。水害にあった時には揚船を利用して母屋の二階と同じ位の高さにある水塚に避難したという。この地方の人々の水との戦いを物語る貴重な資料といえよう。この集落を裏から見ると一段と高い堤防上に寄り集まって住んでいることがわかる。また、ここの裏手にある行人沼は生物学的にも珍しい場所といわれ、県自然環境保全地域に指定されている。そして、このような平地でわかさきなどもとれるという。

元の堤防に戻り谷田川に沿って東へ行くと、やがて東武鉄道の鉄橋と合の



海老瀬 離山貝塚



山口 大杉神社

造物としては大きい部類に属する寛文十一(一六七二)年の阿弥陀如来像がある。なかなかしっかりとした顔立ちをしている。

東武日光線の東、渡良瀬川にはさ

まれた所が海老瀬地区である。ここは、一峯神社の貝塚、離山貝塚などがあり、さらに北の山口には横穴がある。しかし、この横穴は荒れていてその存在を確かめるのがやっとであった。そして、雷神とのつながりが深いという大杉神社には大杉囃子が残されている。

川橋が見えてくる。ここで道は前橋・古河線とまた合流するわけだが、旧道は橋の手前を右へ下りていて川を渡って対岸に出た。谷田川の中洲には今でも馬頭観音が建っているのもそれとわかる。川を渡り切ればそこはもう埼玉県の北川辺町である。

合の川橋のすぐ東、堤防脇に「西たてばやし、向ふじおか、東こが」と書かれた庚申の道しるべがある。万延元(一八六〇)年の銘がある。その隣には、路傍の石

4 館林城下江戸口から海老瀬集落へ

No	名称	年号	備考
67	電泉寺		青面金剛像（元禄元年）
66	遍照寺		念仏講、毎週日曜日
68	トウミギ地蔵尊		頼主 坂巻与八（谷越町）他
69	釈迦堂	天保七年	分福茶釜
70	浅間神社入口の道標		他に道祖神一休、瀬山康長氏宅の庭にある。
71	富士塚神社		瀬山増男氏宅の庭にある。
72	茂林寺	享保二〇年	樹齢三百年以上という
73	花山道標		曹洞宗、山門は大永五年、銅鐘、手洗鉢
74	追分の道標	元文三年	つじの名所
75	松原追分の道標	不詳	館林市指定史跡
76	一本松		
77	普濟寺		
78	郷倉		
79	花山公園		
80	子楡現		
81	秋元生祠		
82	赤生田大林三差路の道標	寛政二年	
83	浅間神社		前方後円墳、常夜塔（嘉永三年）、青面金剛像（享保八年）、道祖神（天保十四年）など
84	古い民家		
85	他宗場		真言宗、曹洞宗の墓地
86	場殿山納経供養の道標	文政二年	
87	出羽三山道標	文政九年	
88	八坂神社		御輿
89	道祖祠		
90	山神社		
91	宝秀寺		道標（年代不詳）

92	山田の馬頭観音		馬頭観音七体（文字塔六体） 明和五年など 西国供養塔
93	羽附の道標	明和三年	
94	已待供養塔		如意輪観音像
95	長竹の道標	天保二年	
96	庚申の道標	万延元年	
97	十九夜塔の道標	嘉永七年	
98	円満寺		千手観音像（県指定重要文化財） 真言宗、亀の子様、銅鐘、阿弥陀堂など
99	安勝寺		
100	正明院墓地	文政六年	ドクロ面他に十九夜塔
101	青面金剛像		勝軍地蔵尊（享保十二年）
102	宝徳院		
103	舟山古墳		
104	沓波山古墳		
105	水神祠		
106	馬頭観世音	文政一〇年	風張地内 堤防上 他に元治元年、板碑など
107	百番供養の道標		台石のみ、現在はこの位置にはない。
108	観福寺		十九夜塔（明和二年）、普門品（安永五年）など
109	最勝寺墓地	享保四年	石塚地内。山伏、巫女の墓石など
110	イボ地蔵	安永九年	他に馬頭観音（安永九年）
111	宝福寺		板倉観音、青面金剛像（享和元年）、性相上人坐像（泉重文）、札所案内道標（文政六年）
112	雷電入口の道標	文化二年	
113	雷電神社		棟札一枚、八幡宮、稲荷神社は国指定重要文化財
114	里神楽		郷土芸能
115	馬頭観音通しるべ		道標（元文五年）、庚申、青面金剛像 十九夜塔など
	実相寺		古文書、絵地図（延享二年）
	荻野家		



## あとがき

本年度の歴史の道調査は五街道という数多い街道調査であり、しかも調査員の人数も限られた中で調査であった。そのため、調査員の方々には、前回までの調査以上に多くの負担をかけることになってしまった。それにもかかわらず、各街道について道の確定、道の現状、文化財の分布状況等確確に把握でき、初期の目的を達成することができた。

今回の調査においても、近代化の波の速さに驚かされることが度々であった。年度当初の調査時と年度終了の際での写真を比較すると、わずか一年足らずの期間に、同じ場所でありながら全く異なる風景が各街道で写し出され、重要のことからも歴史の道調査が時機を得た調査であるとともに、調査の性質をも再認識させられた。

また、本年度調査対象街道は、県内でも脇街道的存在であり、そのためこれまで未調査の部分が多い街道であった。今回の調査によって、これらの街道の道が確定できたことや、一連の文化財調査ができたことは、今後の街道研究上、大きな意義をもつものと思われる。

ここに本調査によって明確になった点をあげると、川と水田の低湿地の中に築かれた堤防上をくねくね曲がりながら、三ノートル幅の旧道がはるか遠くまで続く古河往還。これは県内の他街道では見ることのできない光景である。

また、桐生の絹織物が江戸や上方へ搬出された道であった古戸・桐生道。新道と旧道が縄をなうように残されており、この旧道の一宿である道の中央に堀割を残す丸山宿は印象的であった。

そして、中世には既に相当利用されていたが、江戸時代には日留番所が置かれ、ほとんど通行禁止となりながら、再三にわたる開削願いが提出され、明治初年ようやく開通した時に築かれた峠付近に残る石垣。あるいは、佐渡奉行街道の中世から近世にかけての通路の変遷や、中山道から玉村宿に至る

数条の道筋。また、民家や水路に昔の宿場の面影をとどめる八木原、大久保、総社宿の景観。これらは貴重な街道資料である。

また、本調査では、最も長い距離をもつ下仁田道、下仁田地方の特産である碓氷紙、こんにやく、ねぎ、和紙の搬出路として重要視されていた。現在でも旧道沿いの宿場町であった藤岡、吉井、富岡、下仁田、碓氷等には土蔵造りの商家あるいは旅館屋風の家々が往時の面影をとどめている。だが、国道十八号のバイパス的役割はいまでも変わらず、自動車の交通量は年々増加し、今後の保存対策が待たれる。

特に、この下仁田道の枝道ではあるが、甘楽町小幡の城下町としての道路中央を流れる堀割及び家並、陣屋内の石垣の続く道筋は保存状態が極めて良好であることが確認された。これは本年度調査の大きな成果といえよう。

これらの成果の陰には幾多の労苦や協力があつた。これまで不明であった旧道の道筋について、地元教育委員会の方や地元の方々には日曜日にもかかわらず、炎天下の中を一日中案内していただいたり、背丈より高い草むらをかきわけ橋脚の跡を教えていただいたり、種々お世話になった。

また、調査も必ずしも順調に進んだわけではなかった。樹木や光線の関係で冬季にと予定した写真撮影は、今冬まにみる大雪のため、石仏等雪下に埋れ、雪どけまで撮影困難となったこともあった。あるいは、現在廃道となった峠道を数時間かけてようやく上ったところ霧のため、まわりがすすんで写真撮影できなかつた等、数々の障害もみられた。

だが、調査員の方々の献身的な調査への参加により、課題を一つずつ克服し、ここに、本報告書を刊行することができた。協力いただいた方々に感謝する次第である。

この報告書が、今後の研究用資料として、さらに県民一般の街道探訪のハンドブックとして利用されれば幸いである。そして、調査本来の目的としての保存整備の基礎資料として、本調査で得られた資料をさらに詳細に分析し、十分検討していきたい。

(文化財保護課)

古 河 往 還

---

印刷 昭和56年3月25日

発行 昭和56年3月31日

発行 群馬県教育委員会

〒371 前橋市大手町一丁目1の1

TEL. 0272-23-1111

編集 群馬県教育委員会文化財保護課

印刷 朝日印刷工業株式会社

---